池 田 散 布 地 石 塔 鼻 散 布 地 ほ か 阿 知 境 遺 跡 ほ か

真備町有井境地区 ほ場整備事業に伴う発掘調査

1 9 9 8

岡山県教育委員会

池 田 散 布 地 石 塔 鼻 散 布 地 ほ か 阿 知 境 遺 跡 ほ か

真 備 町 有 井 境 地 区 ほ場整備事業に伴う発掘調査

1 9 9 8

岡山県教育委員会

岡山県南西部に位置する真備町は、高梁川の西岸に位置し、東流する支流の小田川の西岸を町域としています。これまではのどかな田園景観を呈し、今でも県下最大の筍の産地として知られています。町の中央には小田川に沿って旧山陽道が平走しており、国指定史跡の箭田大塚古墳をはじめ、黒宮大塚弥生墳丘墓、二万大塚古墳、岡田廃寺、八高廃寺など、重要な遺跡が多く所在しています。また奈良時代には吉備真備を輩出した地域として著名で、今日の町名の由来にもなっています。

しかし、近年では鉄道・道路の交通網の整備や、総社・倉敷のベッドタウンとしての住宅地建設などによって著しく人口が増大、したがって都市化も急速に進み、埋蔵文化財の保護・保存に対する危機感が迫って来るようになりました。

このような現況のなかで今回、真備町の有井境地区において、担い手育成基盤整備の一環としての 県営ほ場整備事業が行われることとなり、事業実施に先立って関係諸機関との協議を行い、所在する 遺跡の保護・保存と、ほ場整備事業との調整を図るために2度にわたって確認調査を行いました。こ の調査で、広範囲にわたって遺跡が立地することを確認したうえで、保存に向けて度重なる協議を重 ね、現状での保存が困難な3ヶ所の地点については、平成9年4月から全面調査を実施する運びとな りました。

発掘調査の結果、竪穴住居や掘立柱建物などからなる古墳時代の集落跡が発見され、弥生時代中期から室町時代後期にかけての遺物も数多く出土しました。

この報告書が、文化財保護・保存のために活用され、さらには地域の歴史研究を一層深める資料として広く役立ていただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては岡山県文化財保護審議会委員の先生方から種々のご教示とご指導を賜り、また、岡山県倉敷地方振興局をはじめ真備町役場、地元地権者の関係各位から暖かいご協力とご理解をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成10年11月

岡山県古代吉備文化財センター 所長 葛 原 克 人

- 1 本報告書は、岡山県教育委員会が吉備郡真備町有井境地区における県営ほ場整備事業に伴い、実施した池田散布地・石塔鼻散布地ほか・阿知境遺跡ほかの発掘調査報告書である。
- 2 調査を行った各遺跡は、吉備郡真備町有井字池田・石塔鼻・池河原・西砂・小山と箭田字阿知境 に位置しており、発掘調査の総面積は4,246㎡である。
- 3 調査は確認調査と全面調査を行い、確認調査では有井字池田に位置する池田散布地の調査を、平成8年1月8日から同月17日まで岡山県古代吉備文化財センターの尾上元規と小嶋善邦が、また有井字石塔鼻・西砂・池河原と箭田字阿知境に位置する石塔鼻散布地ほかの調査を、平成8年4月17日から5月7日に同センターの大橋雅也と金田善敬がそれぞれ担当した。

全面調査となった有井字小山と箭田字阿知境に位置する阿知境遺跡ほかの調査は、前述の確認 調査の成果を受けて、平成9年4月1日から9月30日まで同センターの根木智宏・金田善敬・時實 奈歩(7月まで)が担当した。

- 4 発掘調査にあたっては、文化財保護専門委員の水内昌康(岡山県文化財保護審議会委員)・近藤 義郎(岡山大学名誉教授、岡山県文化財保護審議会委員)の各氏から指導・助言を受けた。
- 5 調査期間中においては岡山県倉敷地方振興局をはじめ、真備町建設産業部農林整備課、地元地権 者の各位から終始絶え間ない激励とご協力を頂いた。記して深く感謝する次第である。
- 6 本報告書の執筆は、根木・尾上・金田・時實が担当し、文末に文責を記した。また全体の編集は、 根木が行った。
- 7 本報告書掲載の遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 8 出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)において保管している。

凡例

- 1 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は、基本的には真北であって遺跡付近の磁北は西偏6°40′である。
- 2 本報告書の土層断面図や遺構実測図の高度は、すべて海抜高である。
- 3 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記にとおり統一しているが、例外については縮 尺率を明記している。

遺構

竪穴住居・掘立柱建物 1/80 土壙 1/30 溝 1/60

遺物

土器 1/4 土製品·石製品·金属器 1/2

- 4 阿知境遺跡については、調査区を南から1区・2区・3区と呼称し、それぞれ国土座標に基いて 10m間隔の杭を設定して発掘調査を行った。
- 5 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「箭田」を複製したものである。
- 6 遺物番号は、土器以外のものについては材質を示すため、下記の略号を前に付した。

土製品: C 石製品: S 金属器: M

- 7 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きがあるものは小破片もしくは径の不確実なため口径推 定が困難なものである。
- 8 本報告書に掲載した竪穴住居に示すスクリーントーンは、焼土と灰の分布範囲を示す。

目 次

序	
例 言··	
凡 例	
目 次	
第1章 地理的·歴史的環境······	1
第2章 調査および報告書作成の経緯	5
第1節 調査および報告書作成の経過	5
第2節 調査および報告書作成の体制	7
第3章 調査の概要	9
第1節 池田散布地の遺構・遺物	9
第2節 石塔鼻散布地ほかの遺構・遺物	13
第3節 阿知境遺跡ほかの遺構・遺物	19
(1)調査区の概要	19
(2)弥生時代から古墳時代の遺構・遺物	22
1 竪穴住居	22
2 掘立柱建物 ····································	24
3 土壙	30
4 溝	33
(3)古代以降の遺構・遺物	37
1 据立柱建物	37
2 土壙	37
(4)遺構に伴わない遺物	39
第4章 考察	45
出土遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	48
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51
写真図版	

図 目 次

第1図	遺跡位置図1	第27図	
第2図	周辺の遺跡分布図(1/25,000)3	第28図	
第3図	池田散布地・石塔鼻散布地ほか	第29図	
	調査地区範囲図(1/5,000)5	第30図	
第4図	池田散布地 トレンチ配置図	第31図	
	(1/1,000)9	第32図	
第5図	$T - 1 \sim 5$, $7 \sim 9$, $11 \sim 16$, 20	第33図	
	断面図(1/80,1/160)10	第34図	
第6図	T — 6, 10, 17, 18, 19	第35図	1
	平・断面図 (1/80)11	第36図	i
第7図	T-6,9,15 出土遺物11	第37図	i
第8図	石塔鼻散布地ほか トレンチ配置図	第38図	i
	(1 /5,000)13	第39図	i
第9図	T-1~9 平·断面図(1/80) ······14	第40図	i
第10図	T-10~18 平·断面図(1/80) ······15	第41図	;
第11図	T-19~26 平·断面図(1/80) ······16	第42図	;
第12図	トレンチ 出土遺物17	第43図	i
第13図	1区 平・断面図(1/500,1/160)19	第44図	i
第14図	2区 平・断面図(1/500,1/160)20	第45図	}
第15図	3区 平面図 (1/500)21	第46図	
第16図	竪穴住居-1(1/80)22	第47図	
第17図	竪穴住居-1 出土遺物23	第48図	:
第18図	竪穴住居-2(1/80)23	第49図	-
第19図	建物-1・2(1/80) 出土遺物24	第50図	
第20図	建物-3(1/80)25	第51図	
第21図	建物-4(1/80)25	第52図	
第22図	建物-5(1/80)・出土遺物26	第53図	1
第23図	建物-6(1/80)·出土遺物27	第54図	1
第24図	建物-7(1/80)·出土遺物28	第55図	į
第25図	建物-8(1/80)28		
第26図	建物 - 9 (1/80)29		

第27図	建物-10 (1/80)29
第28図	建物-11(1/80)29
第29図	土壙-1(1/30):出土遺物30
第30図	土壙-2 (1/30)30
第31図	土壙-3(1/100):出土遺物31
第32図	土壙-4(1/30)・出土遺物31
第33図	土壙-5(1/30)32
第34図	土壙-6(1/100)・出土遺物32
第35図	溝一1 (1/60)33
第36図	溝一2 (1/60)
第37図	溝-3(1/60)33
第38図	溝-4・5(1/60)34
第39図	溝-6 (1/60)34
第40図	溝-7(1/60)35
第41図	溝-8 (1/60)35
第42図	溝一9~12(1/60)36
第43図	溝一13 (1 /60)36
第44図	溝-14 出土遺物36
第45図	建物-12(1/80) 出土遺物37
第46図	土壙-7(1/20)38
第47図	土壙-8(1/20)38
第48図	土壙-9 (1/30)38
第49図	土壙-10(1/30)38
第50図	1区包含層 出土遺物40
第51図	2 区包含層 出土遺物(1)41
第52図	2区包含層 出土遺物(2)42
第53図	包含層 出土土製品43
第54図	包含層 出土鏡片・青磁碗43
第55図	阿知境遺跡 古墳時代の遺構配置図
	(1/1500)46

表 目 次

表 1 阿知境遺跡検出の掘立柱建物 規模一覧 ………47

図 版 目 次

図版1 池田散布地 調査地区遠景(西から)

T-9(東から)

T-19(東から)

図版 2 石塔鼻散布地 調査地区遠景

(北からT-5~11付近を望む)

T-5 (北から)

T-25(東から)

図版3 阿知境遺跡 調査地区遠景(北東から)

竪穴住居-1(北から)

竪穴住居-2(東から)

図版4 建物-1~3,溝-2,土壙4,5

(南から)

竪穴住居-2,建物-4~8,12

溝-3~8(北東から)

土壙-1 遺物出土状況(北東から)

図版 5 池田散布地 出土遺物

阿知境遺跡 竪穴住居-1出土遺物

土壙-1 出土遺物

図版6 土壙-3 出土遺物

土壙-5 出土遺物

包含層 出土遺物(1)

図版7 包含層 出土遺物(2)

図版 8 石製品

土製品

鏡片

第1章 地理的·歷史的環境

池田散布地・石塔鼻散布地ほか・阿知境遺跡ほかの各遺跡は、岡山県の南西部に位置している吉備郡真備町有井と箭田にまたがって所在する。真備町は、高梁川の支流である小田川の下流域に位置し、東側は高梁川を挟んで都窪郡清音村、南側を倉敷市と浅口郡船穂町、西側を小田郡矢掛町、北側を総社市と接している。

周辺地形の形態は、町の中央部を東流する小田川によって、その両岸に比較的安定した自然堤防が 形成され、特にその高梁川と合流する河口付近には沖積平野が広がり、水田など穀倉地帯が展開して いる。今回調査を実施した地点は、この平地の北東部分に位置する海抜50mほどの小田川と支流の末 政川に挟まれた小山塊の東側に立地している。各遺跡が所在する小丘陵の東側は、坪田や坊田などの 地名が見られることから古代における条里制遺構が残存しているものと推定される。近世以降には灌 漑のための溜め池が多く築造され、現在でも地域の農業用水として利用に供されている。また、これ ら小山塊付近では現在まで町の特産物である筍の生産が営まれており、平地に近い小丘陵の斜面は削 られて階段状を呈しており、地形の改変がいたるところでなされていることが多い。

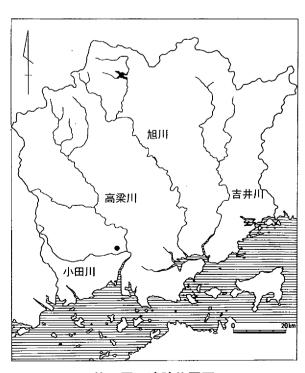
続いて、この真備町の地域ではどのような歴史的展開が見られたであろうか。真備町一帯は、早くから安定した平地が高梁川と小田川によって形成されており、古代以降は旧山陽道が小田川に沿って横断していたことで、交通の要地であったことから多くの遺跡が所在している。地誌的には古代から下道郡に所在し、明治33 (1900) 年には吉備郡を冠してそのまま今日にいたっている。

当該地区において、旧石器時代の遺構と遺物は確認されていないが、周辺では総社市の宝福寺裏山 遺跡や浅尾遺跡などからナイフ型石器や石槍が出土している。

縄文時代には、小田川をさかのぼった呉妹・ 電崎地区で行われた発掘調査で、河道肩口より 後期から晩期に至る土器片がまとまって出土し ており²、町内で最古の遺物といえるであろう。

弥生時代には、以前から生活の痕跡が山裾や 小丘陵上に点在することが想定されていた³。実際、呉妹地区において行われた確認調査でも、 出土した土器から前期以降の集落の存在が確認 されている⁴。また遺構や出土状況など詳細なこ とは不明ではあるが、同地区から大正 4 (1915) 年に流水文銅鐸が出土している。

弥生時代後半から終末期において特筆すべき 点は、古墳時代に続く墳墓として小田川流域に は尾崎の黒宮大塚弥生墳丘墓、北側を東流する 新本川を望む丘陵上に立坂弥生墳丘墓や伊与部 山遺跡など、多数の墳丘墓が築造されているこ



第1図 遺跡位置図

第1章 地理的·歷史的環境

とである。このことは当該地区がこの時期における吉備中枢部の一端を担うものであったことを物語るものと考えられる。また墳丘墓とは別に小型の竪穴式石室に吉備地方を特徴づける特殊器台・特殊 壺を伴った墳墓が低丘陵上に築造されている。調査地区周辺では、特殊器台を棺として転用した遺構 が検出されている箭田の西山遺跡がそれである。

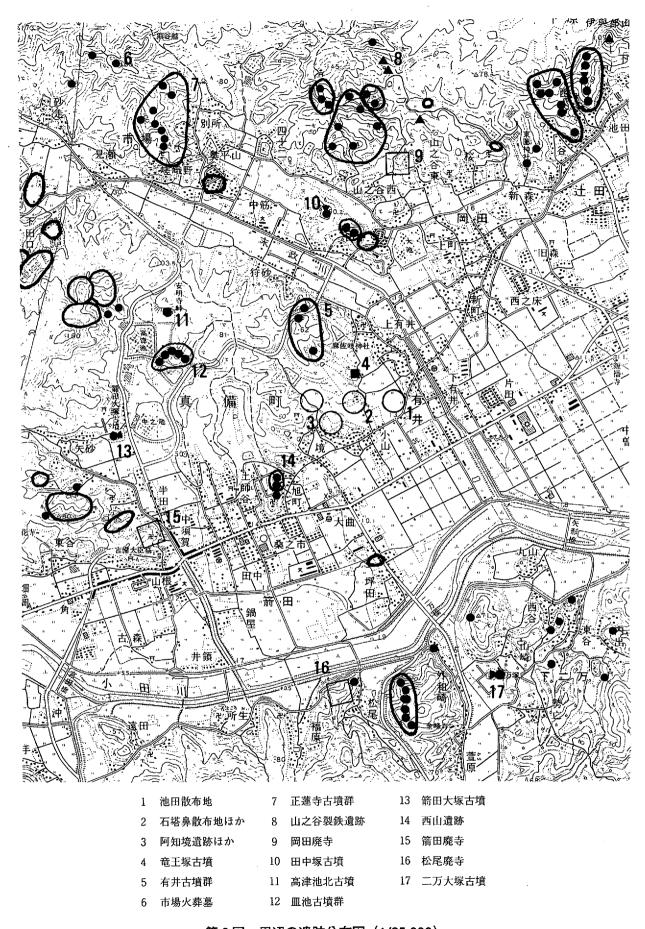
今回調査を行った各遺跡でも後期の遺構・遺物が若干出土しており、また同一丘陵上の近接する西山遺跡では中期から後期末の竪穴住居と袋状土壙が検出されていることからも、集落は依然、丘陵上もしくは山裾の高く安定した地点に立地することが再確認されたといえるであろう。

古墳時代になると、丘陵上に古墳がしだいに築造されるようになる。その全時代的な分布の傾向は、第一に小田川下流の南側、高梁川との合流地点に近い南山地区から下二万地区にかけての地域、第二に町北東部の末政川流域およびその北の新本川までの地域、第三に小田川北岸、箭田大塚古墳が所在する箭田を中心に、西部の尾崎地区から妹地区に至る地域が想定されている。当該地区は、第二の区域にあたるが、その中でも調査地点の北東に位置する竜王塚古墳は、一辺約35mの方墳で、頂部に竪穴式石室を有し、この石室内からは馬具などとともに直刀が一振出土している。、築造の時期は5世紀後半と見られている。また同一丘陵上には、有井古墳群・皿池古墳群・高津池北古墳などが立地している。高津池北古墳は昭和56 (1981) 年に発掘調査が実施され、7世紀前半の須恵器を伴う古墳であることが確認された8。

また当該地域の周辺では、小田川を挟んだ南側には全長60mの天狗山古墳や45mの二万大塚古墳が所在している。それぞれ5世紀後半、6世紀初頭に築造され、形象・円筒埴輪片などが出土している⁷。西の谷を入ったところには、箭田大塚古墳が所在している。箭田大塚古墳は、最近の調査によって全長約55m、高さ7m程度で張り出しを持った円墳と推定され、周溝が巡っていたことが確認されている⁸。石室の全長は19.1mで、玄室内には3基の組合せ式石棺が現存している。遺物は須恵器・土師器をはじめ、鉄製品・玉類や形象埴輪片・円筒埴輪片が多く出土しており、築造の時期としては6世紀後半が考えられる。古墳時代の終末に至っては、小規模ながらも尾根筋の集落を見下ろす地点に古墳が若干築造されるにとどまっている。

ここで時期別の傾向を整理してみると、小田川流域には弥生時代終末期に墳丘墓が築造されるようになった後、前期古墳は僅かに見られるだけとなる。中期には小田川流域と北に位置する新本川流域を統合する首長によって南山に天狗山古墳が築かれる。そして後期には突如として石室に巨石を用いた箭田大塚古墳の出現をみ、継続する大規模な古墳はなくなって次代の寺院建立へと引き継がれている。このことからこの付近は古代における吉備真備を輩出した下道氏の本貫地で、その勢力基盤が弥生時代後期には流域にあって、古墳時代初頭には一時、新本川流域に移行もしくは他の勢力に淘汰された。しかし5世紀後半に天狗山古墳や竜王塚古墳が出現するころ再び勢力を回復して箭田大塚古墳の築造を頂点に以後衰退化が著しく、古代豪族としてのメルクマールは古墳から寺院建立へと変貌していったものと推定される。

奈良時代には、前述のようにそれまでの古墳に代わって寺院が建立されるようになる。箭田大塚古墳の南に位置する箭田廃寺、岡田の岡田廃寺、二万の松尾廃寺などがそれである。それぞれ箭田廃寺は、旧山陽道のすぐ北に、岡田廃寺は末政川の北にある丘陵の南山裾に、松尾廃寺は小田川の南側で平野が見渡せる丘陵上に位置している。現在では当時の規模を示すものは堂宇の礎石だけである。これらの遺跡からは共通して備中地方を中心に出土する吉備寺式として知られている蓮華文の鬼瓦など



第2図 周辺の遺跡分布図(1/25,000)

第1章 地理的·歷史的環境

の瓦片が出土していることが注目される。またこの時期以降、一部において火葬が行われるようになり、近隣では市場火葬墓⁹や調査地が所在する谷を北に入った丘陵上から骨蔵器¹⁰が発見されている。

古代以降にあって、文字史料として調査地点付近のことを記した著名なものに藤原宮跡から出土した3点の木簡"と江戸時代の文政期に出土したいわゆる「矢田部益足買地券」が認められる。「矢田部益足買地券」は天平寶字 7 (763) 年に公地公民の原則に反して土地の売買を記した初見史料として以前より出土していた。しかし当初、その史料的価値は疑問とされたが、その後の類例史料の出土によりその事実関係が改めて確認された。平安時代には天皇即位に伴う護祚大嘗祭が斎行される際、備中国下道郡が前後 5 回にわたって主基としてト定され¹²、以後備中国が主基国として固定化されるようになった。

中世には、この付近にも寛喜元 (1229) 年に初見記事がみられる蘭荘が発展。するなど、荘園の開発が盛んになってくる。また室町時代には上野氏や庄氏といった国人の台頭がめざましくなり、矢掛町との境に位置する猿掛城などは一時、毛利氏進出のための戦略的拠点にもなっている。江戸時代になると、有井と岡田を含む旧薗村は岡田に陣屋を構えた外様大名の伊東藩によって、また八田村 (箭田)は備前池田藩による支配を幕末まで受けて明治維新を迎えた。

明治時代以降、近代化に伴って町村の合併が著しく行われた。明治初年に周辺12村あったものが、中頃には7村に統合され、戦後の昭和27(1952)年には当該調査地区を含む薗村をはじめ、5ヶ町村の合併によって真備町が形成され、今日に至っている¹⁴。 (根木)

註

- 1 総社市史編さん委員会『総社市史』考古資料編 1987年3月
- 2 岡山県教育委員会「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』62 1986年3月
- 3 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 1977年12月
- 4 岡山県教育委員会「蓮池尻遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」79 1992年1月
- 5 真備町教育委員会『西山遺跡』 1979年10月
- 6 岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会『高津池北古墳』 1982年3月
- 7 真備町教育委員会『真備町の文化財』 1996年3月

岡山大学考古学研究室天狗山古墳発掘調査団によって墳丘測量とトレンチ調査が行われ、数々の成果をあげている。 なお、報告書作成中の1998年3月に現地説明会が行われた。

- 8 真備町教育委員会『箭田大塚古墳』 1984年3月
- 9 中田啓司「備中真備町市場の一火葬墓」『古代吉備』第3集 1959年10月
- 10 山磨康平「真備町箭田阿知境奥出土の骨蔵器」『古代吉備』第10集 1988年4月
- 11 奈良国立文化財研究所『藤原宮跡出土木簡概報』
 - ・吉備中国下道評二万マ里
 - ・多比大贄
 - 同 『藤原宮跡出土木簡』(四) 1980年4月

備中国下道郡矢田マ里春税五斗

- 同 『藤原宮跡出土木簡概報』(十) 1991年5月
 - · 吉備中国下道郡
 - ・矢田里矢田マ刀祢□
- 12 国史大系『続日本後紀』 天長十(833)年三月己酉条

史料纂集『史部王記』 天慶九 (946) 年五月十三日条

国史大系『日本紀略』 寛和二 (986) 年十一月十六日条

長和五(1016)年四月七日条

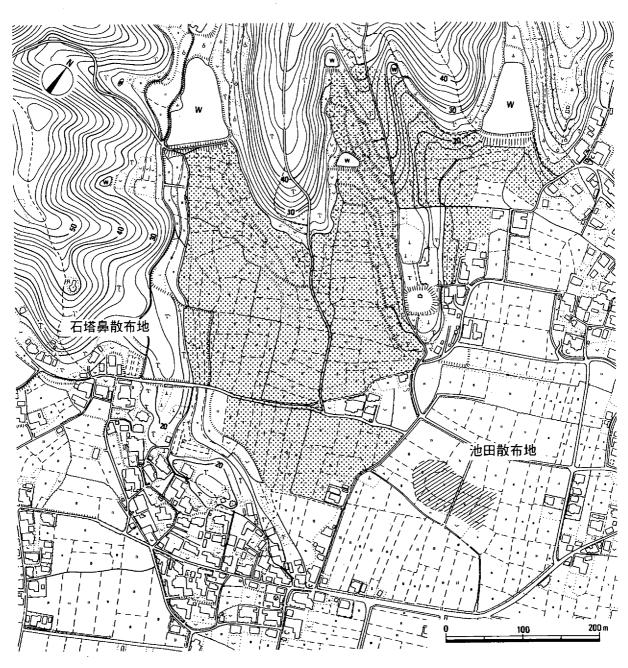
国史大系『帝王編年記』 保安四(1123)年十一月十八日条

- 13 国立歴史民俗博物館「日本荘園データ」 2 『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書』 6 1995年 3 月
- 14 岡山県『岡山県市町村合併誌』総編 1960年4月

第2章 調査および報告書作成の経緯

第1節 調査および報告書作成の経過

平成8年度に吉備郡真備町有井・箭田両地区において、担い手育成基盤整備事業の一環として、県営のほ場整備がおこなわれることとなった。工事に先立って岡山県倉敷地方振興局から遺跡の所在を確認する照会が岡山県教育庁文化課に提出された。しかし有井字池田地区には現状の地形から未周知



第3図 池田散布地・石塔鼻散布地ほか 調査地区範囲図 (1/5,000)

第2章 調査および報告書作成の経緯

の古墳の推定地があり、また計画地域内に所在する同じく未周知の遺跡の位置を把握する必要があるので、改めて岡山県教育庁文化課は、真備町産業課・町教育委員会と岡山県古代吉備文化財センターを含めた遺跡の取扱について協議を行うこととした。この協議でトレンチによる遺跡の立地範囲をおさえるための確認調査を実施し、確認された遺構は保存措置として30~40cmほど地上げする。町教育委員会では、確認された古墳の位置を遺跡地図に表示することとが確認された。

調査は、平成8年1月8日から同月29日までに岡山県古代吉備文化財センターの調査員2名を当てて、古墳の推定地を中心に3m×1.5mのトレンチを計20本設定し、調査面積を90m²として実施した。結果、古墳の存在を肯定させる遺構・遺物は確認されなかったが、弥生時代後期から古代にかけての溝や土壙が若干検出されたことで、周辺に未周知の遺跡が存在する可能性が認められた。

年度が代わって平成8年4月17日から5月7日の期間においては、引き続いて有井字石塔鼻・池河原・西砂、箭田字阿知境において所在する未周知の遺跡の範囲を正確に把握するために、同センターの調査員2名を配して調査面積156㎡で、トレンチ計26本に及ぶ調査を実施した。その成果として、町指定の史跡である竜王塚古墳の周辺と、調査地北側に位置する西砂地区と南側の石塔鼻・池河原・箭田字阿知境の各地区において、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の存在を確認した。

これらの調査による成果を受けて岡山県教育庁文化課は、埋蔵文化財の保護・保存と、地域基盤整備のために行われるほ場整備事業との調整を図るにあたって、現状でのできる限りの保存措置がなされるように倉敷地方振興局や地元の真備町役場と度重なる協議を行なった。その結果、ほ場整備の工事に際しては従来通り細心の注意を払って盛り土等によって現状保存を図りながら実施する。しかし対象地の西側3ヶ所の地点については工事の早急な実施と、設計面から現状での保存は困難であることなどから、やむなく遺跡の全面調査による記録保存の措置を執ることを決定し、平成9年4月から同センターの調査員3名を配して、調査面積4,000㎡として9月まで発掘調査を実施した。

調査は南側から順次着手し、調査地点が異なるために1区・2区・3区と呼称して調査区を分けて 実施した。途中、7月から調査員が3名から2名へと減員になったが、9月30日には発掘調査を完了 した。発掘調査の終了寸前の9月22日には埋蔵文化財専門委員会を開催して、先生方から多くのご教 示にあずかった。また9月19日には業者委託によるラジコンのヘリコプターによる空中撮影を実施し、 古墳時代後半の掘立柱建物群の様相を中心に遺跡全体の写真撮影を行ない、調査を終了した。

その後、10月からは調査員1名で整理・報告書作成を行うこととなった。

報告書作成作業は当初、図面の整理作業からはじめ、並行して遺物の復元作業、写真撮影を行った。なかでも数年次に亙る調査のために図面の整理作業に多くの時間を費やすこととなった。引き続き、遺構のトレース作業と、復元作業が終了した遺物について実測作業を順次行っていった。後半は遺物のトレース作業と図版の割付作業と若干の遺物について写真撮影を並行して行った。平成10年2月には執筆担当者に原稿作成の依頼を行い、編集作業と年度末までに図面・遺物・写真整理などすべての整理作業を完了した。

これらの整理作業を行なうにあたっては、丸山啓子・三垣佐知子・河内一美の3名の方々に大変お世話になった。

最後に調査現場で酷暑のなか、3名の調査員を助けて発掘作業に従事された多くの作業員の皆さん に深く感謝申し上げたい。 (根木)

第2節 調査および報告書作成の体制

阿知境遺跡の発掘調査終了後に、引き続いて報告書の作成を行った。事業にかかる岡山県教育委員会ならびに岡山県古代吉備文化財センターの体制は、下記の通りである。

発掘調査(平成7年度)

岡山県教育委員会		総務課	
教 育 長	森崎岩之助	課長	丸尾 洋幸
教育次長	黒瀬 定生	課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
岡山県教育庁文化課		総務主幹	守安 邦彦
課長	大場 淳	主 査	石井 善晴
課長代理	樋本 俊二	主 任	木山 伸一
参事	葛原 克人	調査第一課	
課長補佐(埋蔵文化財係長)	高畑 知功	課長	正岡 睦夫
主 任	若林 一憲	課長補佐(第一係長)	松本 和男
岡山県古代吉備文化財センター		主 事	尾上 元規(調査担当)
所 長	河本 清	"	小嶋 善邦(′ ′ /)
次 長	髙塚 惠明		
/ (文化課本務)	葛原 克人		

発掘調査(平成8年度)

(文化課本務)

·			
岡山県教育委員会		文化財保護参事	正岡 睦夫
教 育 長	森崎岩之助	総務課	
教育次長	黒瀬 定生	課長	丸尾 洋幸
岡山県教育庁文化課		課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
課長	大場 淳	総務主幹	守安 邦彦
課長代理	松井 英治	主 査	木山 伸一
"	臼井 洋輔	調査第一課	
参 事	葛原 克人	課長	高畑 知功
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝	課長補佐(第一係長)	江見 正己
主 査	若林 一憲	文化財保護主任	大橋 雅也(調査担当)
岡山県古代吉備文化財センター		主事	金田 善敬(/)
所 長	河本 清		
次 長	髙塚 惠明		
		1	

葛原 克人

第2章 調査および報告書作成の経緯

発掘調査・報告書作成(平成9年度)

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生 教育次長 平岩 盂

岡山県教育庁文化課 課 長 髙田 朋香 課長代理 臼井 洋輔 西山 猛 参 事 葛原 克人 課長補佐(埋蔵文化財係長) 平井 勝

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 籔本 克之 次 長 正岡 睦夫 総務課

長 課 小倉 昇 課長補佐(総務係長) 井戸 丈二

主. 杳 木山 伸一

調査第一課

課 툰 高畑 知功

課長補佐(第一係長) 江見 正己 文化財保護主事 根木 智宏

(調査・報告書作成)

金田 善敬(調査担当)

主 車 時實 奈歩(/)

調査日誌抄

池田散布地

平成8年1月8日 資材搬入、調査開始

1月9日 T-1~5.12 調查終了

1月10日 T-7, 11, 13, 14

調査終了

1月11日 T-8, 9, 16~19

調查終了

1月12日 T-6, 10, 20 調査終了

1月16日 T-15調査終了、

埋め戻し作業

1月17日 資材撤収、調査完了

石塔鼻散布地ほか

平成8年4月17日 資材搬入、調査開始

4月19日 T-7~10 調査終了

4月22日 T-5, 6, 11 調査終了

4月23日 T-1~4, 12~14

調査終了

4月24日 T-15~18 調査終了

4月25日 T-19~22 調査終了

4月30日 T-23~26 調査完了

5月7日 資材撤収、調査完了

阿知境遺跡ほか

平成9年4月1日 事業開始

4月8日 資材搬入、1区 調査開始

4月9日 重機による表土除去開始

4月16日 重機による表土掘削終了

5月23日 2区 調査開始

6月9日 重機による表土除去開始

6月27日 重機による表土除去終了

7月1日 3区 調査開始

7月23日 3区 調査終了

9月19日 空撮 実施

9月22日 埋蔵文化財専門委員会開催

9月24日 現地説明会開催

9月25日 1区、2区 調査終了

9月29日 資材撤収

9月30日 調査完了

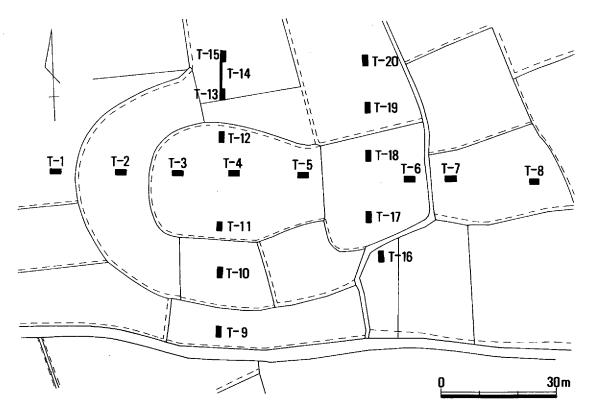
第3章 調査の概要

第1節 池田散布地の遺構・遺物

池田散布地は、当初、現在の田畑の畦畔が前方後円墳を思わせる形態にめぐっていることから、削平された前方後円墳の可能性が考えられた。また土器片も散布していることから、確認調査を実施することになった。トレンチは、前方後円墳と仮定した場合の墳丘主軸上に $T-1 \sim T-8$ 、それと直交する 2 本のライン上に $T-9 \sim T-15$ (「後円部」部分) および $T-16 \sim T-20$ (「前方部」部分)を設定した(第4図)。

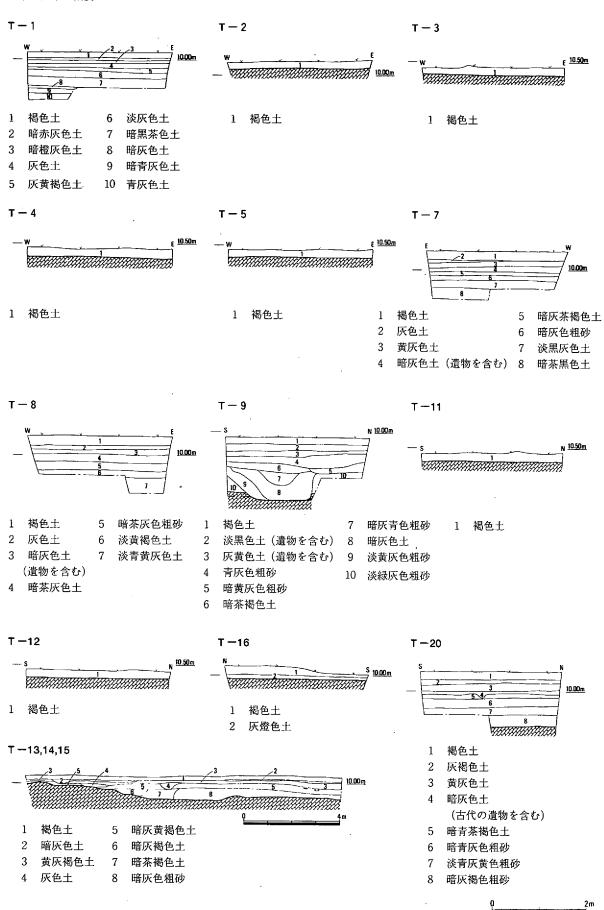
調査の結果、古墳の存在を想定させる資料はまったく得られず、池田散布地にみられる現在の畦畔の形態は自然の地形を反映したものであることが判明した。中央部の $T-2\sim5\cdot10\sim12\cdot16$ では、現在の耕作土を除去するとすぐに地山が露出し、もと地形の高かった部分が削平された状況である。この付近には「権現圦」という字名が残っており、以前は高まりになっていたと推定される。これらのトレンチのうちT-10では、幅約70cm、深さ約20cmの溝状の遺構が確認されたが、遺物が伴っておらず時期は不明である(第6図)。

地形は周辺部にいくほど下がっていくが、削平を受けていない周辺部のトレンチでは、弥生時代から古代の遺物包含層が良好な状態で残存していた。また、その下層において遺構も検出されている。

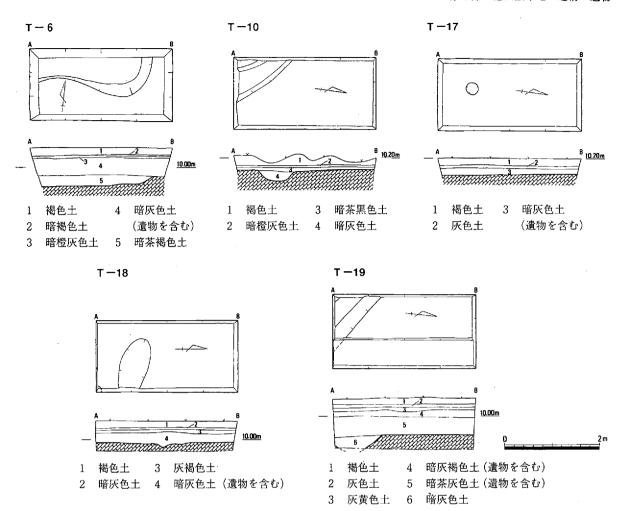


第4図 池田散布地 トレンチ配置図 (1/1,000)

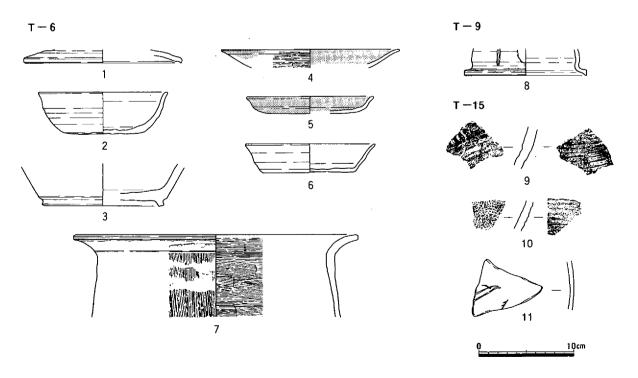
第3章 調査の概要・



第5図 T-1~5, 7~9, 11~16, 20 断面図 (1/80,1/160)



第6図 T-6, 10, 17, 18, 19 平・断面図 (1/80)



第7図 T-6, 9, 15 出土遺物

第3章 調査の概要

T-6では深さ約25cmの不整形な土壙状の遺構が確認された(第6図)。埋土中からは古代の土師器片が出土しており、その時期の遺構と考えられる。T-9では、東西方向に走る幅約2m、深さ約1.1mの溝が検出された(第5図)。伴う遺物は乏しいが、古墳時代前期の土師器と思われる破片を含んでいることや、上層に古代の包含層が認められることから、古墳時代に位置付けられよう。 $T-13\sim15$ では、東西方向に走る弥生時代の溝が検出された。溝の北端は明らかでなく流失した状況であるが、土層断面から数回の改修がうかがえる。埋土は粗砂で、弥生中期から後期にいたる幅広い時期の土器が出土している。その中に、絵画土器とみられる資料がある(第7図11)。黄褐色を呈する弥生時代後期の壷胴部の破片と考えられるもので、外面に線刻が認められる。わずかな部分であり、モチーフは不明である。T-17では包含層の下面において径10数cmの小形のピットが確認されている。内部を掘り下げていないので深さは不明である。T-18においても包含層の下面で土壙とピットが検出された。土壙は平面楕円形の浅いものでピットも小規模である。T-19でも同様に包含層の下面で幅1m強、深さ約30cmの溝を検出している。これらの包含層下面において検出された遺構は、包含層の時期から判断して、弥生時代から古代に位置付けられよう。

包含層には多くの遺物を含んでいるが、特に9世紀代の遺物が顕著に認められる(第7図1~10)。 1 は青灰色を呈する須恵器の杯蓋で、端部にわずかな屈曲をもつ。 2 は須恵器の杯身で、明灰色を呈 する。高台をもたないタイプである。3は青灰色を呈する須恵器長頸壷の底部である。4は内面黒色 土器の皿で、外面も口縁付近が一部黒色化しており、内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキが施さ れている。5は精良な胎土を用いた土師器の皿で、不明瞭ながら内外面に丹塗り痕跡が認められる。 6 は浅黄橙色を呈する土師器の杯で、底部は箆切り後中央部に指頭圧を加えている。これも精良な胎 土を用いているが、丹塗りの痕跡は認められない。7は土師器の甕で、暗黄灰色を呈する。外面はタ テハケ、内面はヨコハケの調整がなされている。8は灰色を呈する須恵器の円面硯で、径13㎝に復元 される小形のものである。脚部のみの破片であるが、縦長楕円形の透かしと縦方向の深い線刻が認め られる。以上1から8の資料は、いずれも9世紀を前後する時期に位置付けられる。9・10は土師質 の土器であるが、同様の破片が数箇所のトレンチから計10数片出土している。 いずれも小片であるが、 暗褐色ないし黄橙色を呈するもので、外面には平行タタキ、内面には同心円当て具痕がみられる。器 形は不明であるが、土器片の湾曲の度合いから比較的小形の土器と想定され、また外面はよく焼けて 赤化している部分がある。このような特徴は、北部九州の「玄界灘式製塩土器」と呼ばれているもの などに類似している。玄界灘式製塩土器の時期も、本遺跡の包含層の時期とほぽ一致するものであり、 本遺跡出土のこれらの土器も古代の製塩土器の可能性がある。古代の遺物では、ほかに移動式カマド の破片なども出土している。古代の遺物以外では、包含層や耕作土層中より、弥生時代前期、中期、 後期の土器片や、7世紀代の須恵器、中・近世の土器、陶磁器などが出土している。

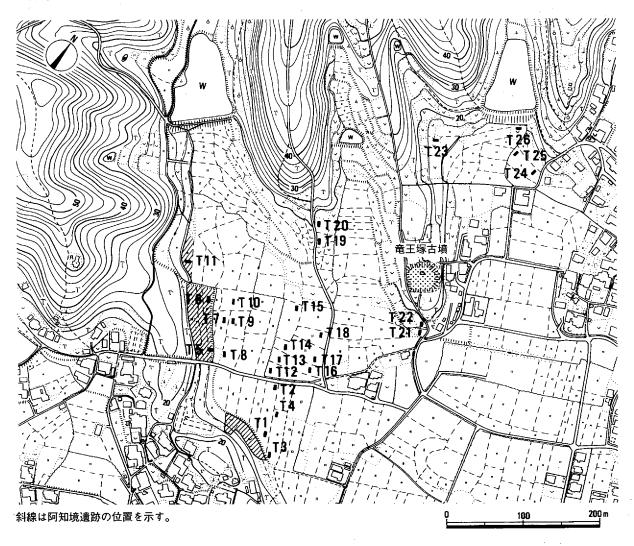
最後に、本遺跡の性格についてであるが、弥生時代、古墳時代の集落址のほか、包含層出土の古代の遺物が注目される。丹塗り土師器や黒色土器、円面硯などの出土は、通常の集落というよりも、公的施設の存在を想定する材料となり得るものである。また製塩土器の可能性をもつ土師質土器の出土についても、本遺跡が海岸から離れていることを考えれば、同様の材料となるであろう。こうした性格の背景には、遺跡の眼前を東西に走る旧山陽道との関係が考えられる。

遺跡の広がりについては、今回の確認調査部分をこえてさらに広がっているようであり、遺跡の範囲を正確に捉えることはできなかった。 (尾上)

第2節 石塔鼻散布地ほかの遺構・遺物

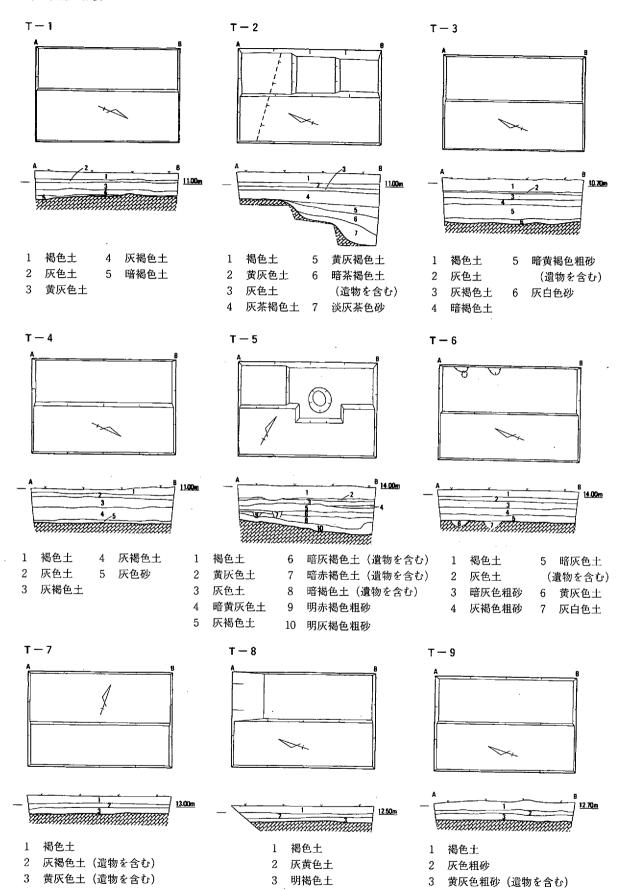
石塔鼻散布地ほか(以下、石塔鼻散布地という)の確認調査は、ほ場整備により影響をうける区域内にトレンチ(2×3m)を26ヶ所設定し(第8図)、遺構・遺物の有無を確認することを目的とし、土層断面観察、遺構検出および図面作成、写真撮影を行なった。調査区域は北から南にのびる尾根および尾根裾に広がる緩やかな斜面上に位置し、大字名では有井、箭田、小字名では阿知境、石塔鼻、池河原、西砂がそれに相当する。以下、調査の概要を述べる。

T-1からT-4 (第9図) は全面調査時における第1調査区の北側に位置する。いずれも地表面から50~80cmほどで地山が検出された。トレンチ内からは古墳時代の遺物を含む層が検出され、土師器、須恵器等が出土した。特にT-2では地山の落ち込みが確認され、土師器、須恵器、石器 (第12図S1)が出土した。地山の落ち込みには砂質土および粘質土が堆積していたことから、西から東に向けて河道が存在していた可能性が指摘できる。この付近は $T-19 \cdot T-20$ が存在する尾根と、調査区域の西側から南東にのびる尾根間の谷部に相当したと考えられ、T-2で検出された落ち込みはこの谷部を流れていた河道のひとつと推測できる。

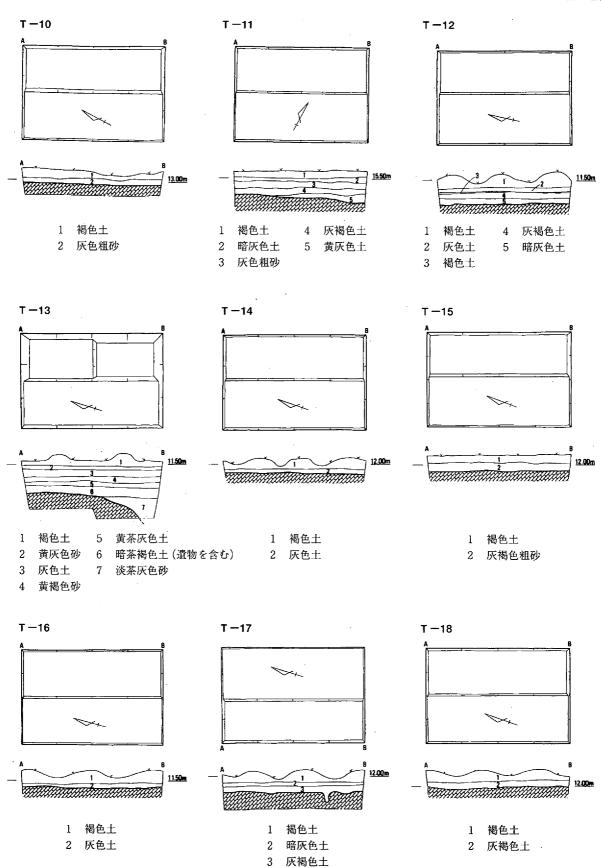


第8図 石塔鼻散布地ほか トレンチ配置図(1/5,000)

第3章 調査の概要

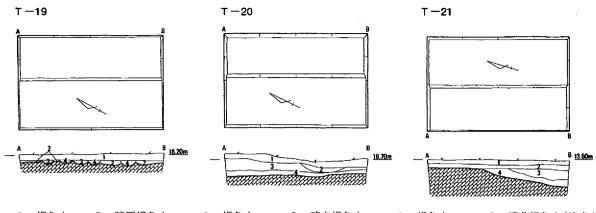


第9図 T-1~9 平・断面図(1/80)



第10図 T-10~18 平・断面図(1/80)

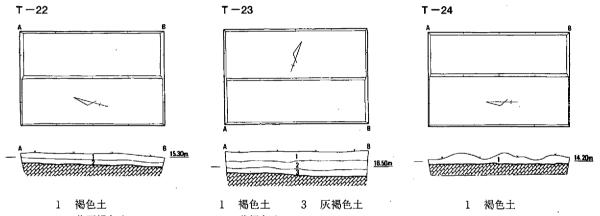
第3章 調査の概要



- 1 褐色土 3 暗灰褐色土

- 1
 褐色土
 3
 暗黄褐色土(造成土)

 2
 暗黄褐色土
 4
 暗灰褐色土
 2
 暗赤褐色土
 4
 暗灰褐色土(造成土)
- 2 明褐色土 4 暗赤褐色土

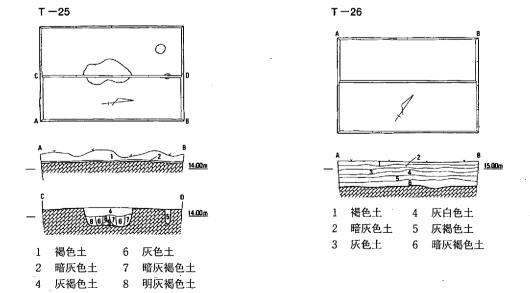


2 黄灰褐色土

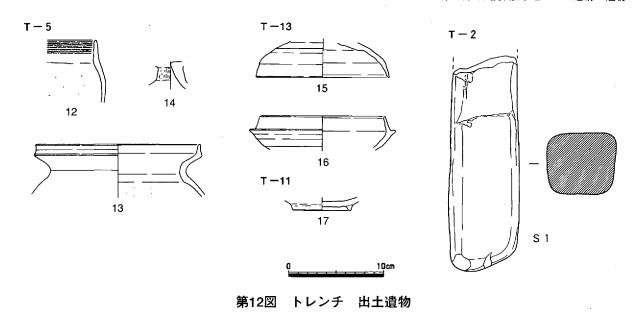
4 灰褐色土

5 暗褐色土 9 灰白色土

2 黄褐色土



第11図 T-19~26 平・断面図(1/80)



T-5からT-11(第9・10図)は調査区域内の西側に位置し、北から南にのびる尾根の東斜面上に存在する。斜面の上方に設定されたトレンチ (T-5・T-6・T-11)では良好な状態で遺構および遺物包含層が確認された。なかでもT-5では厚さ約50cmにもおよぶ包含層が確認され、弥生土器、土師器、須恵器が出土した (第12図 $12\sim14$)。12から14は弥生土器で12は短頸壷の口縁部、13は甕の口縁部、14は高杯の脚柱部である。またT-5内で径約50cm、深さ約40cmの土壙が確認された(この土壙は全面調査により建物 -7に伴う柱穴であることが判明した)。T-6では表土下約50cmで柱穴と思われる遺構を検出し、その上面には土器の細片を含む包含層が残存していた。T-11では地山上の包含層より土師質土器 (第12図17)が出土した。17はいわゆる早島式土器の高台片である。これらの出土遺物よりT-11では中世の遺構の存在が考えられる。一方、斜面の下方に設定されたトレンチ(T-7からT-10)ではいずれも地表面から浅いところで地山が検出された。このことから、T-7からT-10付近はかなりの削平をうけていることが判明した。そのため、遺構は検出されず、出土した遺物も少量であった。

T-12からT-18(第10図)は調査区域内の中央付近に位置する。表土下30~40cmの浅いところで地山が検出された。その結果、元来は尾根の先端部であったものが、後に削平され、現在のような緩やかな地形に改変されたものと推測される。一方、T-13ではトレンチ南半部で地山の落ち込みがみられた。落ち込み内には砂が堆積しており、河道に相当したものと考えられる。このことから、T-13付近はT-2と同様、尾根間の谷部のような地形であったと考えられ、T-13で検出された河道はこの谷筋を流れる河道のひとつであったと思われる。T-13では須恵器(第12図15・16)等が出土している。15は杯蓋であり、16は杯身である。このことから、この河道は古墳時代後期を中心とする時期に形成されたものと考えられる。

 $T-19 \cdot T-20$ (第11図) は南北にのびる尾根の丘陵上に位置する。いずれも表土下 $20\sim40$ cmで地山を検出した。遺構は確認されなかった。

 $T-21 \cdot T-22$ (第11図) は調査区域の東端にあたる尾根の先端に位置する。このトレンチの北には古墳時代中期の方墳である竜王塚古墳が存在する。竜王塚古墳に近いT-22はかなりの削平を受け

第3章 調査の概要

ており、表土下で地山が検出された。また、T-22の下方に位置するT-21でも表土下で地山が検出された。T-22の南半部では、南に向かって傾斜する地山の斜面を検出した。T-21では古墳時代の須恵器片が出土し、トレンチの上方から流れ込んだものと推測できる。このことから $T-21 \cdot T-22$ の上方には何らかの遺構が存在していた可能性のある。

T-23(第11図)は竜王塚古墳の北約180mの尾根の東斜面上に位置する。表土下約50cmで地山が検出されたが、遺構は確認されなかった。

T-24から26 (第11図) は調査区域の東端、大年池の南側に位置する。 $T-24 \cdot T-25$ は大年池の東側尾根の先端部に設定された。その結果、 $T-24 \cdot T-25$ では表土直下で地山が検出され、いずれもかなりの削平をうけていることが判明した。しかし、T-25からは地山面で土壙および柱穴が確認された。出土遺物がなく、詳細な時期は不明ではあるが、調査区内から出土した遺物から判断すれば、中・近世の遺構と推測できる。T-26は大年池の南側に位置し、尾根間の谷斜面に相当する。そのため、堆積土は厚かったが遺構等は確認できなかった。

以上、調査の概要を述べた。今回の調査区域はいずれも尾根上あるいは尾根から緩やかに広がる斜面上に位置する。特に尾根上あるいは尾根の先端付近に位置するトレンチでは表土から浅いところで地山が検出されることが多く、また、若干の遺物は出土するものの、遺構は確認できなかった。このことから、尾根上あるいは尾根の先端部は田畑の開墾や造成により削平を受けており、遺跡が存在した可能性は否定できないものの、その残存状況は良くないものと推察される。これに対して、尾根の斜面部、特に調査区域の西側に存在する尾根の東斜面 $(T-5\cdot T-6\cdot T-11)$ では遺構および遺物包含層が良好な状態で検出された。このことから、この付近の尾根の斜面部は後世の削平を免れ、遺構が比較的良好な状態で残存している可能性が高いと考えられる。また、 $T-2\cdot T-13$ 付近では旧河道の痕跡がみられ、尾根間の谷部に河道が存在したと推定できる。また、調査区域の東端部に位置するトレンチ (T-25) でも遺構が確認された。

このように、石塔鼻を中心とした地区には広範囲にわたり、弥生時代から古墳時代を中心とし、中・近世にいたる集落跡が存在していた可能性が高く、部分的に良好な状態で残存していたことが判明した。 (金田)

第3節 阿知境遺跡ほかの遺構・遺物

(1)調査区の概要

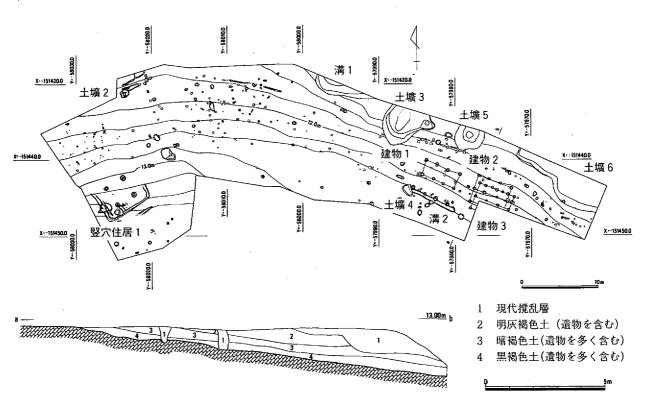
本報告書に掲載している阿知境遺跡ほか(以下、阿知境遺跡という)の調査区は、小田川と支流の 末政川に挟まれた丘陵の東側に位置しており、全部で3ヶ所である。一番南側に位置する調査区を1 区と呼称して、中心部分を2区、北側を3区として1区から順に調査を開始した。

1区は、海抜13mの北から伸びる丘陵が東へ曲がった先端付近にあって、調査区に南接する竹林によって遺構の残存状況が慮られたが、遺構面までの遺物包含層が比較的厚く、遺構は良好な状態で検出された。

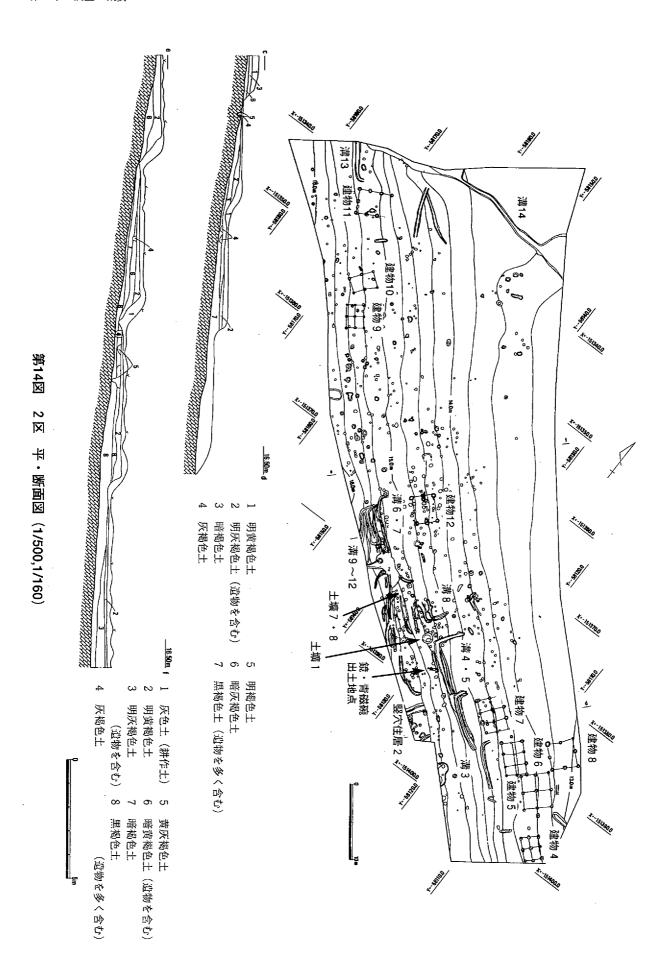
層序的には、現耕作土の直下に明灰褐色の中世から近世と考えられる土層があり、その下に総体的に黒褐色の遺物包含層が検出された。この包含層は、南から北に向かって下がる傾斜面に海抜12.5~13m付近から堆積したものであって、調査区北側の深いところで約2m、北側の浅いところでも約1mを測る。この包含層はすべての調査区においてみられるものであって、非常に硬く締まっており、主に弥生時代中期から古墳時代後半までの土器片が多く出土した。

遺構は、中近世のものは認められず、大半が古墳時代のものである。黒褐色の遺物包含層を除去した地山面から、調査区の東側に3棟の建物群と土壙群、西側に竪穴住居を1棟検出した。

2区は、北側の丘陵の本体部分から尾根が分かれる地点にあって、海抜は、16~13m付近に位置し、全体的に北東方向に向かって緩やかに傾斜している。1区から尾根に沿って約30m北側に位置し、当



第13図 1区 平・断面図 (1/500, 1/160)



- 20 **-**

該調査の中心部を占める。現状では4段の耕作地が存在しており、1区同様、遺構の残存状況が憂慮されたが、遺物包含層の堆積が非常に厚く、地山面まで耕作が至っていなかったために、遺構は良好な状態で残存していた。

層序としては、基本的には1区と同じであるが、1区には見られなかった黒褐色の遺物包含層を掘り込んだ中世と思われる柱穴群が全域で多く認められた。この様相は、北側の3区に近づくにしたがって顕著になり、ついには2区の北端部では中世の柱穴が大半を占める状態が認められた。特に遺物は細片が多かったが、建物-7の西側の柱穴からは、ほぼ完形品の土師質土器の椀が出土している。

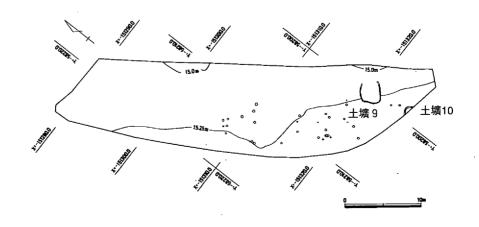
黒褐色の遺物包含層は、東側の建物-4から7付近では比較的堆積が厚いが、北にむかうにしたがって徐々に堆積状況が薄くなり、建物-9付近から北側ではほとんど見受けられなかった。またこの遺物包含層からは、古代末から中世初頭とみられる青磁の碗と鏡がほぼ同じ地点から出土している。遺物の各説は後段にゆずるが、出土した地点を精査して遺構の確認を行ったが、遺構の存在を確認することはできなかった。しかし、青磁碗が上向きで出土したことや出土した鏡に繊維状のものが付着していたことなどから土壙墓の存在を考えなければならないと思われる。

次に遺構についてみてみると、南側から西側にかけての広い範囲で柱穴を中心とした遺構群が検出された。しかし、竪穴住居-2から溝-9から12付近にかけて、調査区西側の遺構の残存状況は悪く、遺構が存在する地山面より深く掘られ、遺構が残存していない部分が数ヶ所確認された。現地での聞き取り調査によれば、戦前に調査区の西側に付設されている農道を造成する際に、当時より田畑であった現地から大量の土砂を採取した、ことによるものであった。

3区は、阿知境遺跡の北端に位置しており、調査区は北東方向に緩やかに傾斜している。海抜15m付近にあって、2区から北へ約10mの地点に立地する。

層序は、現耕作土の直下に中世の遺物包含層が全体的に認められ、土壙2基と柱穴群を検出した。 黒褐色の遺物包含層は、現地での聞き取り調査において、調査区の最も低くなっている地点を調査区 に沿って戦後すぐに当該地区の北に位置する池から用水を引くために大溝を建設した、ということも あって、ごく僅かしか検出できなかった。

また調査区の北端部は、先の大溝を建設するときの枝溝等によってかなり深くまで破壊されていた。 以下、各時代・各遺構について説明を加える。 (根木)



第15図 3区 平面図(1/500)

(2) 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物

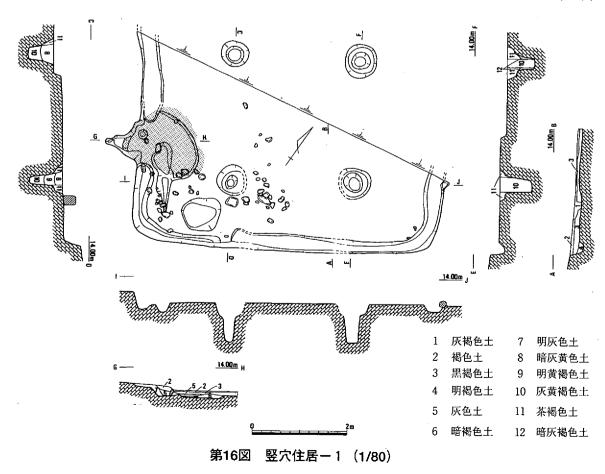
1. 竪穴住居

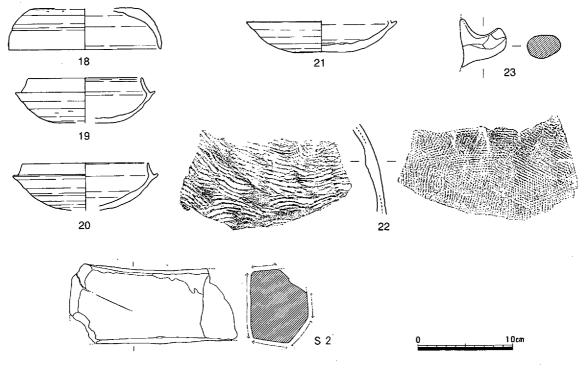
竪穴住居-1 (第16・17図, 図版3-2・5-2・8-1)

1区の南西地点から検出された竪穴住居である。北側は現状の耕作地形成に伴う法面によって破損を受けていたために床面を検出できなかった。平面形は方形を呈し、規模は一辺約6.5m、検出面からの深さは約30cmであった。棟方向は北西から南東方向に向き、床面積は推定30㎡である。壁体溝は広いところで幅約40cm、狭いところで約20cmを測り、南西側の一部を除いて全体に巡っているものと考えられる。柱穴は床面で径60cm、深さは80cmを測り、柱の間隔はそれぞれ等しく2.6mである。

また住居の西側にはカマドが付設されていた。カマドは床面から西側壁面にかけて僅かに掘り窪めていて、全体に炭が入っており、燃焼部と焚口との境は全体的に不明瞭であった。燃焼部の奥には支脚となる角礫が置かれていて、その奥はあまり焼けておらず、煙道部は緩やかに立ちあがって終わる。

遺物は床面直上から須恵器の杯身を中心に、若干の土師器が出土している。22は須恵器の甕の破片で、カマドの焚口と燃焼部の境から出土した。内面を上にして置かれており、台として再利用されていたものと考えられる。S2は砥石である。カマドの南側の床面から出土した。流紋岩製で1338.28gを測る。一部破損した部分を除いて全面に使用痕跡が認められる。時期は出土した須恵器から6世紀後半と考えられる。 (根木)

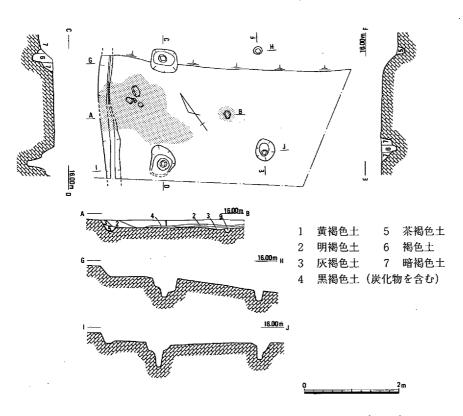




第17図 竪穴住居一1 出土遺物

竪穴住居-2(第18図, 図版3-3·4-2)

2区の南東端の地点から検出された竪穴住居である。北側は現状の耕作地形成の際に、法面として切り削られていた。東側と南側は、調査区範囲外へと続いているため検出できなかった。平面形は方形を呈し、規模は一辺約4.8m前後、検出面からの深さは約20cmを測る。



第18図 竪穴住居-2 (1/80)

壁体溝は西側のみ検出され、幅約18cm、深さ約10cmを測る。カマドは確認できなかったが、西壁から中央に向かってもずかではあるが、炭化物の堆積層が検出されたが、床頭等がら焼けたれなかった。

遺物は、床面から出土 した須恵器片が前述の竪 穴住居-1と同時期のも のと考えられ、明確では ないが、廃絶した時期は、 6世紀後半頃と考えられ る。 (根木)

2. 掘立柱建物

建物一1

(第19図、図版4-1)

1区の東側から検出された 3間×1間の建物である。平面は長方形を呈している。規模は桁行4.56m、梁行2.06mで、床面積は9.4m 2 を測る。

遺物としては柱穴内から 土師器片が多く出土したが、1点のみ図示できた。 24は土師器の壷の口縁部である。全体的に器表面が 剥離しているので、調整の 詳細は不明だが、外反気を に開く二重口縁を持つもので、立ち上がりは短い。頸 の外面には、縦方向のハケメが僅かに認められる。

時期は、古墳時代初頭と 考えられる。 (根木)

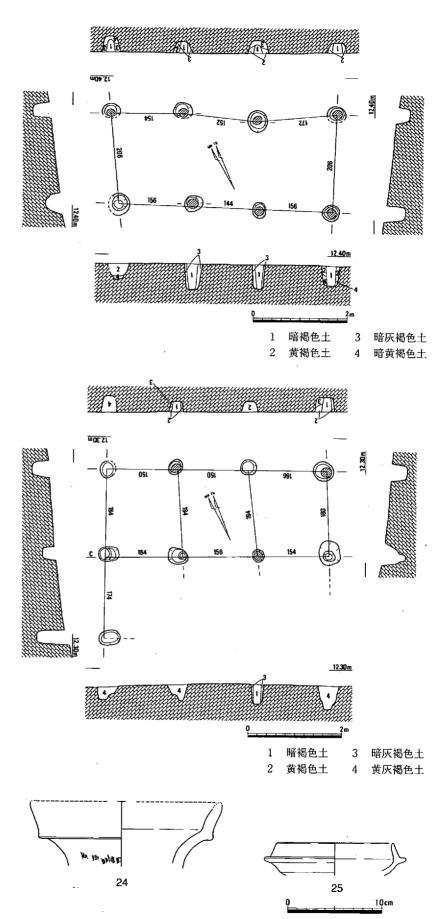
建物一2

(第19図, 図版4-1)

建物-1の約2m東に位置し、後述の建物-3と重複する4間×3間の総柱建物である。建物の南東部は、調査区範囲外となるために検出はできなかった。

平面は長方形を呈し、規模は桁行4.78m、梁行3.44mで、床面積は16.4m²を測る。

遺物は、柱穴内から須恵 器片と土師器片が多く出土



第19図 建物一1〈上〉・2〈下〉(1/80)・出土遺物

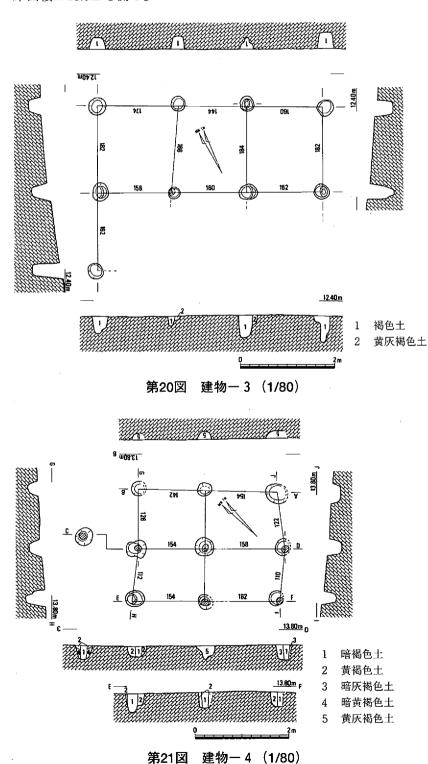
した。そのうち図示できたものは、**25**の須恵器の杯身だけである。特徴は、口縁のたちあがりは短く、 その端部は内傾化する特徴を有する。

時期は、遺物から6世紀後半が考えられる。

(根木)

建物-3(第20図, 図版4-1)

前述の建物-2と重複する4間 \times 3間の総柱建物である。南東側は、建物-2と同様、調査区外へと続くと見られるので、検出はできなかった。平面形は長方形で、規模は桁行4.80m、梁行3.44mで、床面積は16.5m²を測る。



遺物は柱穴から須恵器と 土師器の細片が若干出土し ており、時期としては古墳 時代後半と考えられる。

(根木)

建物一4

(第21図, 図版4-2)

2区の東端で、5軒の建物群が密集する地点で、一番東に位置する建物である。 東側が調査区境にあるために、さらに南へ続いて行くのかは不明である。

現状での形態は2間×2間の総柱建物で、西側には 棟持柱を有する。規模は桁行3.16m、梁行2.38mで、床 面積は7.5㎡を測る。

遺物は柱穴から土師器片が若干出土しており、時期は古墳時代後半と考えられる。 (根木)

建物一5

(第22図, 図版4-2)

2区の東側、建物-4の 約3.5m 西に位置する。2 間×2間の総柱建物で、東 側には棟持柱を有する。そ の規模は、一辺の柱の間隔 が東西方向、南北方向とそ れぞれほぼ等しい。床面積

第3章 調査の概要

は16.5㎡を測る。相対的に中央の柱穴が浅いので、束柱の可能性が考えられる。

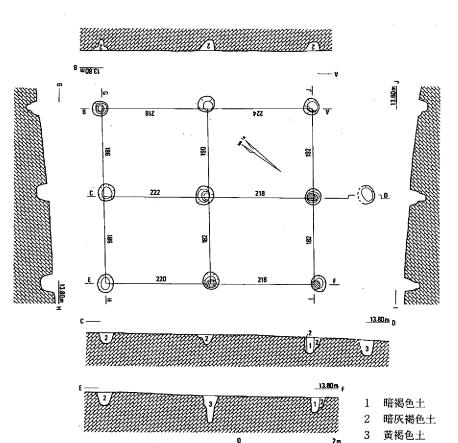
遺物は柱穴から図示した須恵器片をはじめ、土師器片が出土している。26は須恵器の杯身の口縁部で、たちあがりが短く、内傾化している。時期は遺物から6世紀後半と考えられる。 (根木)

建物-6(第23図, 図版4-2)

建物-5の西側に一部接する位置に立地する3間×2間の総柱建物である。東西には棟持柱を有し、その規模は桁行2.92m、梁行2.92mで、床面積は13.3m²を測る。東西方向の中央柱列が浅いので東柱の建物と考えられる。西側には付帯施設として溝が掘られており、幅50~60cm、深さ20cmを測る。溝の両端は、斜面堆積の遺物包含層を除去後に検出したために確認できなかった。遺物は溝の中から須恵器を中心に出土している。27は図示できた杯蓋である。稜線は全体的に鈍く、口縁部は内傾化する特徴を有する。時期は6世紀後半と考えられる。 (根木)

建物-7(第24図, 図版4-2)

建物 - 6 の北西側、約1.5mの地点に位置する 3 間× 2 間の総柱建物である。北西端に位置する柱穴は、上層の遺物包含層除去作業時に一緒に削り込まれて、確認することができなかった。規模は、桁行4.50m、梁行3.04mで、床面積は13.7㎡を測る。また西には溝が付設されており、幅50~60cm、深さ40cmを測る。溝の東側は完了しており、西側は遺物包含層を除去後に検出したために確認できなかった。遺物は溝の中から須恵器片が多く出土している。28の杯身は口縁の立ち上がりが短く、内傾化する。時期は須恵器から 6 世紀後半と考えられる。 (根木)



第22図 建物-5 (1/80)・出土遺物

建物-8 (第25図,

図版4-2) 建物-6の約3.5m北 に位置する2間×2間

の建物である。中央の 柱穴は確認できなかっ た。規模は桁行3.46m、 梁行3.79mで、床面積は 13.1㎡を測る。

遺物は土師器片のみで、古墳時代後半と考えられる。 (根木)



建物-9(第26図)

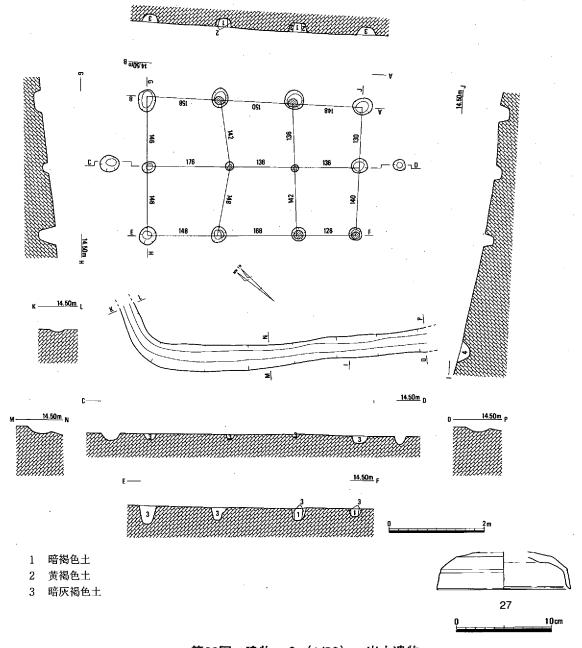
2区の北側、3棟ある建物群の一番南側に位置する2間×2間の総柱建物である。規模は桁行3.10m、梁行2.26mで、床面積は7.01㎡である。

遺物は出土しなかったが、柱穴埋土の状況から時期は古墳時代以降と考えられる。 (根木) 建物-10(第27図)

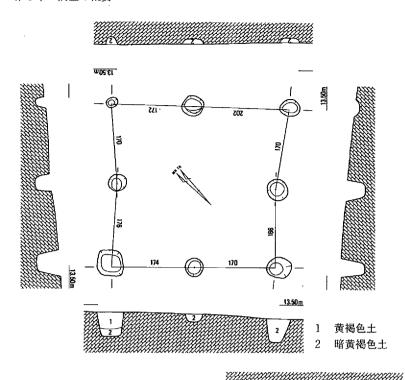
2区の北側、3棟のうちの真ん中に位置する2間×1間の建物である。規模は桁行3.20m、梁行2.10mで、床面積は6.72m 2 を測る。

遺物は建物-9同様に見られなかったが、埋土の状況から古墳時代以降と考えられる。 (根木) 建物-11(第28図)

2区の最北端に位置する3間×2間と思われる建物である。東西方向の柱穴列は、深さが揃って

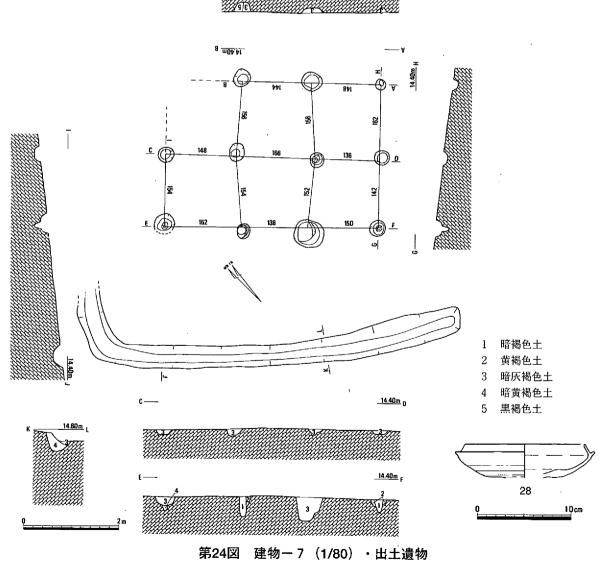


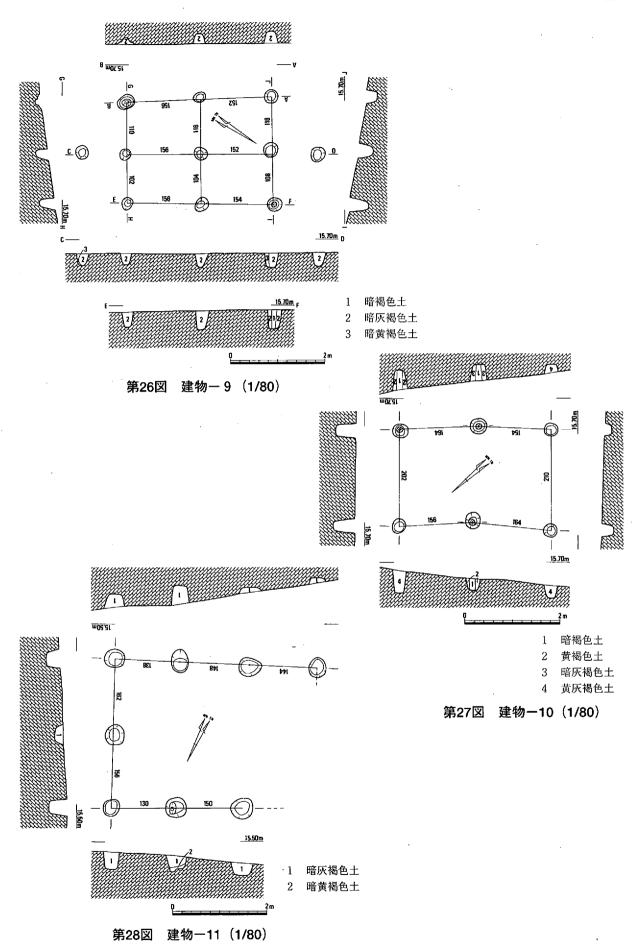
第23図 建物-6 (1/80)・出土遺物



いる柱穴の底面より低くなってしまい、これ以上東へは続かないものと考えられる。規模は桁行4.30m、梁行3.18mで、床面積は13.7㎡を測る。 時期としては遺物が出土していないので不明だが、埋土から古墳時代以降と考えられる。 (根木)

第25図 建物一8 (1/80)





3. 土壙

土壙-1 (第29図, 図版 $4-2\cdot 3$, 5-3)

土壙-1は2区の中ほどに位置する。ほぼ円形を呈しており、径約1.4mを測る。土壙底面の外周には幅 $10\sim30$ cmの溝が部分的に巡っている。土壙の中央からやや南東よりに深さ約15cmの穴が存在する。底面には土器が散乱しており、いずれも破片の状態で出土した。29は直口壷の胴部である。30は鉢の口縁部である。31は台付鉢の台部である。これらの遺物から、時期は古墳時代前期前葉と考えられる。また、土壙-1は上面が削平されており、その性格は詳細には不明ではあるが、土壙の底部周辺に溝が施されていることから、袋状土壙の可能性が考えられる。 (金田)

土壙-2 (第30図)

土壙-2は1区の北西部に位置する。径約 $1\sim1.2$ m、深さ約30cmを測る。埋土より須恵器片が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期以降と考えられる。 (金田)

土壙-3(第31図,図版6-1)

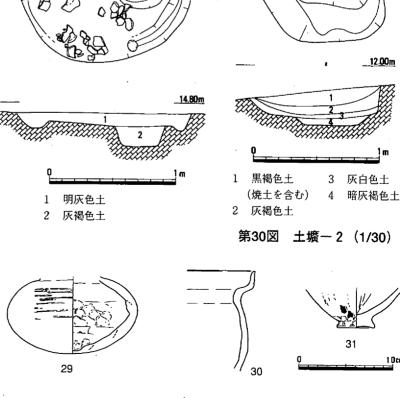
土壙-3は1区の中央部北端に位置する。土壙は斜面を掘り込んでつくられており、径約5m、深さ約1.6mを測る。土壙の北半部は調査区外のため、調査を行なっていない。土層の断面観察の結果、

第2・3層と第4層を境に埋土 および出土遺物の様相が異なる ため、第2・3層を上層、第4 ~6層を下層とし、遺構の掘り 下げおよび遺物の取り上げを行 なった。

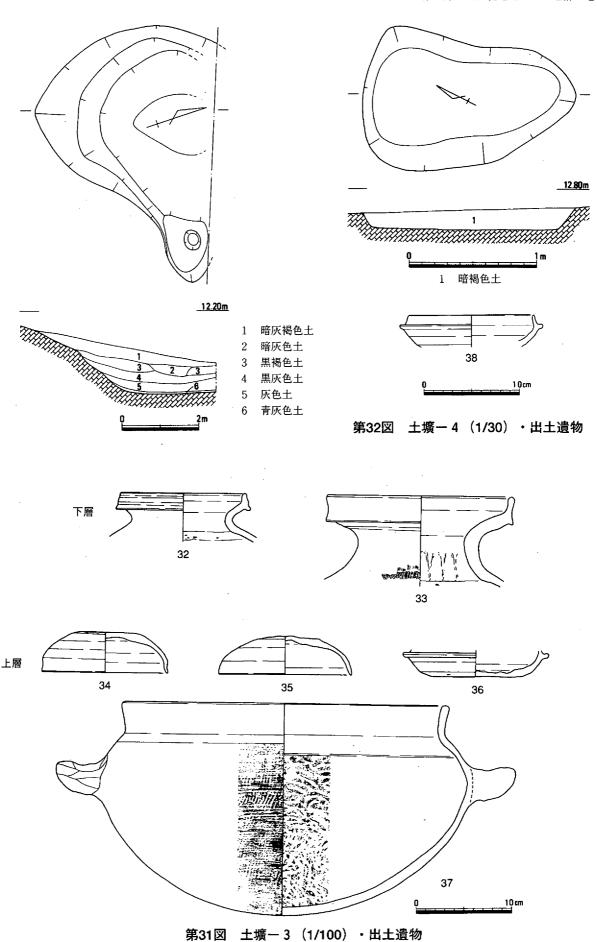
その結果、土壙の下層からは 弥生~古墳時代の土器が出土し た。32は弥生土器の甕の口縁部 で、33は弥生土器の壷の口縁部 であり、最下層から出土した。

上層では、土師器片、須恵器片が出土した。34・35は須恵器杯蓋である。36は杯身である。37は甕で、把手を持つ。また細片ではあるが、土壙内からは古代の土師器・須恵器の破片も出土している。このことから、土壙一3は弥生時代後期後半頃に掘削され、8世紀頃まで存在していたものと考えられる。

(金田)



第29図 土壙一1 (1/30)・出土遺物



第3章 調査の概要

土壙-4(第32図, 図版4-1)

1区の後述する溝-7の西側に位置する。最大径約1.7mを測る。埋土から須恵器が出土した。**38** は杯身である。遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期後半以降と考えられる。 (金田)

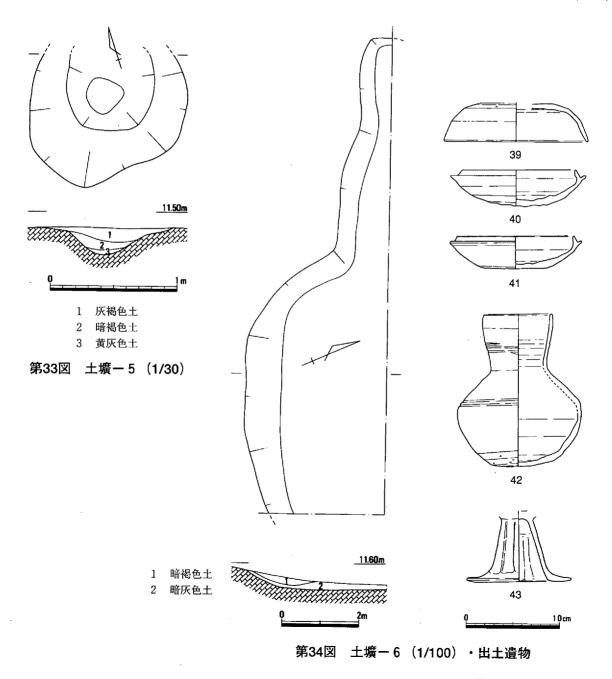
土壙-5 (第33図, 図版 $4-1\cdot 6-2$)

1区の東半部に位置するほぼ円形の径約1.3mの土壙である。埋土より土師器片が出土したことから、古墳時代初頭頃と考えられる。 (金田)

土壙-6 (第34図, 図版 6-2)

1区の東端に位置する。遺構としては土壙と扱ったが、その形状から緩やかな斜面上の窪地である可能性を否定できない。埋土からは土師器片・須恵器片が出土した。39から41は須恵器の杯蓋と杯身である。42は須恵器の長頸壷、43は土師器高杯の脚部である。

時期は古墳時代後期後半と考えられる。 (金田)



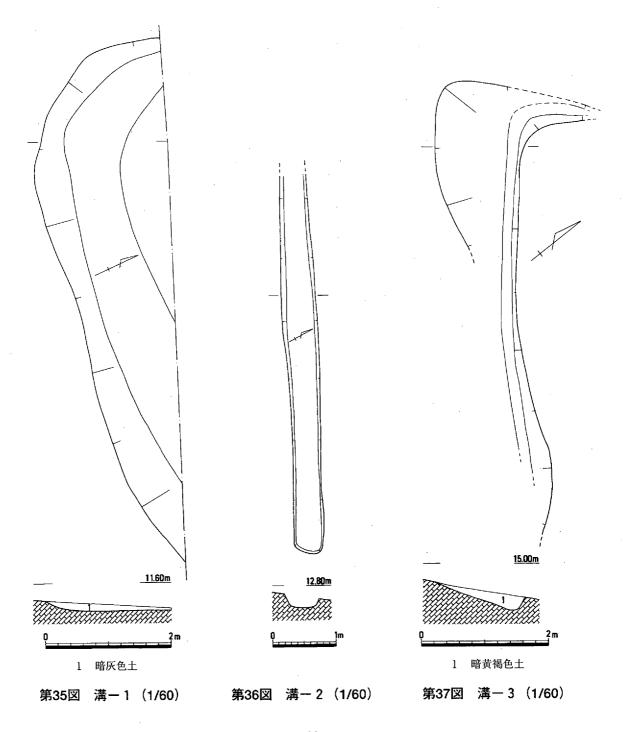
4. 溝

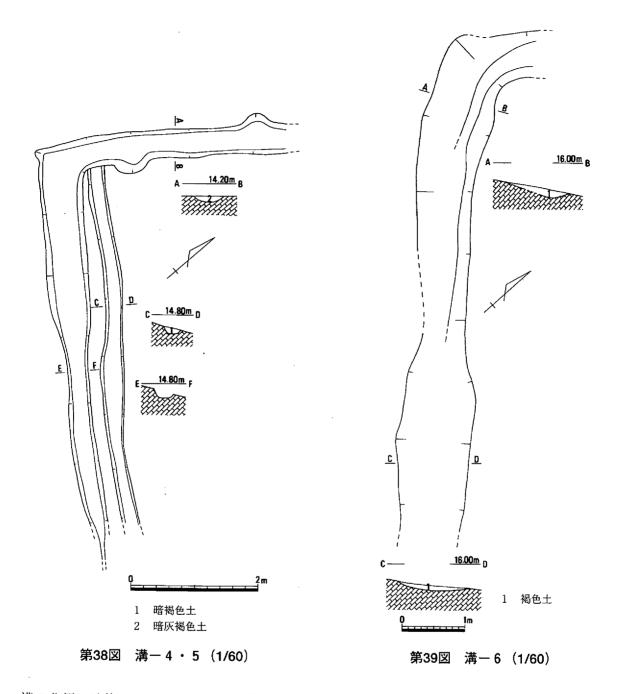
溝一1(第35図)

1区の北側に位置する。断面は浅い皿状を呈する。溝というよりは斜面上の窪地の可能性を否定できない。出土遺物が僅少であるために、詳細な時期は不明である。 (金田)

溝-2(第36図, 図版4-1)

1区東半部の斜面上端に位置し、建物-1の南側に存在する幅約50cmのまっすぐな溝である。溝は建物-1の棟方向とほぼ同じ向きであることから、建物-1に付随する施設であったと考えられる。





溝の北側には約1.8m ~ 2 mの間隔で柱穴が検出されており、塀のようなものが存在したか可能性が考えられる。溝-2 は建物-1 の敷地を区画するのと同時に、斜面上から流れ込む雨水などを防ぐ役割等があったものと考えられる。溝内からは土師器片、須恵器片が出土している。

時期は建物-1と同様に古墳時代前期頃と考えられる。 (金田)

溝-3(第37図, 図版4-2)

2区の東側に位置する。溝の北西部は建物-4を囲むようにL字状に折れ曲がる。溝は幅0.6~1.4m、深さ約30cmを測る。溝からは土師器片および須恵器片が若干出土した。

建物-3 もしくは建物-4 に関連した溝と想定され、時期は古墳時代後半以降と考えられる。

(金田)

遘-4·5(第38図, 図版4-2)

2区の南東部に位置し、溝-3から北西にのびる溝である。溝-4はほぼ直角に北へ折れ曲がる。溝は幅約 $40\sim60$ cmであり、埋土より土師器片・須恵器片が出土した。溝-3同様、建物を囲む溝であった可能性が高い。

時期は古墳時代後半以降と考えられる。

(金田)

溝-6(第39図, 図版4-2)

2区の中央部の斜面上端より検出された溝である。溝は幅約70~120cm、深さ約10cmでL字状に折れ曲がる。

時期は埋土の色調等から古墳時代後期後半以降と考えられる。

(金田)

溝-7(第40図, 図版4-2)

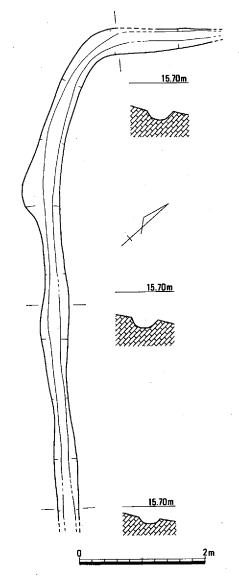
2区の中央部の斜面上半部に位置する。溝は幅約30~40cm、深さ約10cmを測る。溝は北端部でほぼ 直角に折れ曲がる。建物-6を囲むように配置されていることから、建物-6に伴う遺構と推定され る。溝は建物の敷地を区画するとともに、斜面上方からの雨水等の流入を防ぐ役割等をもっていたも

のと考えられる。溝内から土師器片と須恵器片が出土している。

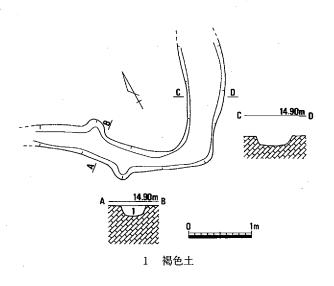
これらの遺物から時期は、古墳時代後期後半以降と考えられる。 (金田)

溝-8(第41図, 図版4-2)

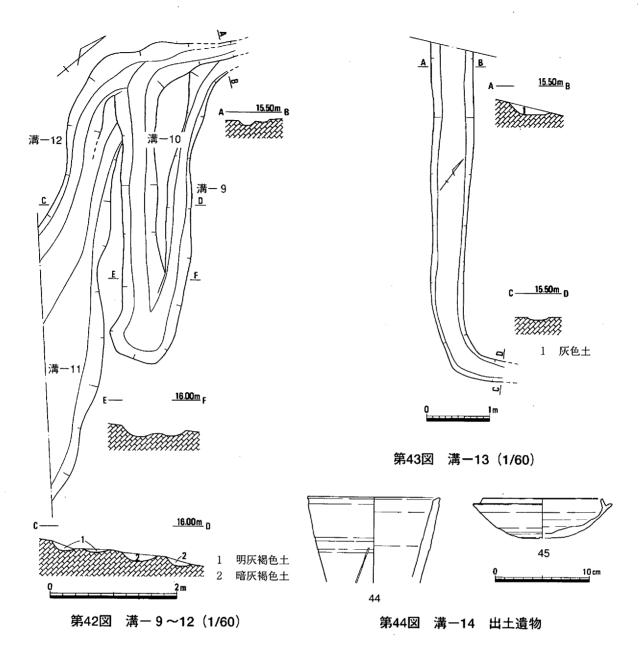
2区の中央よりやや南側に位置する。北東方向に折れ曲がり、幅約30~40cm、深さ約10cmを測る。前述の溝と同じように建物などの敷地の区画を示す目的があったものと推定され、溝-4・5との関連から時期は古墳時代後半以降と考えられる。 (金田)



第40図 溝一7(1/60)



第41図 溝一8(1/60)



溝一9~12(第42図)

溝-7の南西部に位置する。溝-7を含め、建物-6に関連する溝と考えられる。幅約20~100cm、深さ約10cmを測る。詳細な切り合い関係は判然としないが、これらの溝は幾重にも重なっている様相を呈しており、幾度かの溝の改修が行われた結果と推定できる。溝内からは土師器片、須恵器片が出土した。これらの出土遺物より、時期は古墳時代後期後半以降と考えられる。 (金田)

溝-13(第43図)

2区の北半部に位置する。幅約60cm、深さ約10cmを測る。溝は南東部でほぼ直角に北東方向に折れ 曲がる。埋土から僅かではあるが土師器片や須恵器片が出土している。時期は詳細には把握できない が、中世以降の可能性が考えられる。 (金田)

溝-14(第14:44図)

2区の北西部に位置する。埋土から土師器片と須恵器片が出土した。**44**は須恵器の擂鉢の口縁部と推定される。**45**は須恵器の杯身である。時期は古墳時代後期後半以降と考えられる。 (金田)

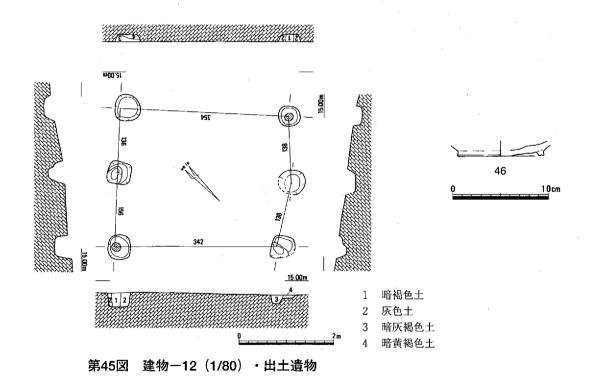
(3) 古代以降の遺構・遺物

1. 掘立柱建物

建物-12(第45図, 図版4-2)

2区のほぼ中央付近に位置する2間×1間の建物である。規模は短辺が2.92m、長辺が3.54mで、 床面積は10.3㎡を測る。柱穴の堀り方は直径50~60cmで、楕円形もしくは方形状の形態を呈す。柱穴 の底面は、若干浅いものも見受けられるが、ほぼ水平に掘り込まれていた。柱痕跡も2ヶ所で検出された。

遺物は、図示した須恵器片を含めて土師器片が若干出土している。**46**は杯身の底部である。高台はわずかに「ハ」字形に開き、接地面は外方向に張り出している。内面には自然釉が付着していて、底面のひずみが顕著である。建物の時期は奈良時代と考えられる。 (根木)



2. 土壙

土壙-7(第46図)

2区中央付近、建物-12の南側に位置する。南側が若干尖ったような不整円形状を呈す。埋土中には小礫が埋め込まれていた。遺物はなかったが埋土の状態から中世以降と考えられる。 (根木)

土壙-8(第47図)

土壙-7に近接した北側に位置する。楕円形の掘り方に一部深く掘り窪められていた。上面には小礫と拳大の礫が認められた。遺物はなく、埋土から中世以降と考えられる。 (根木)

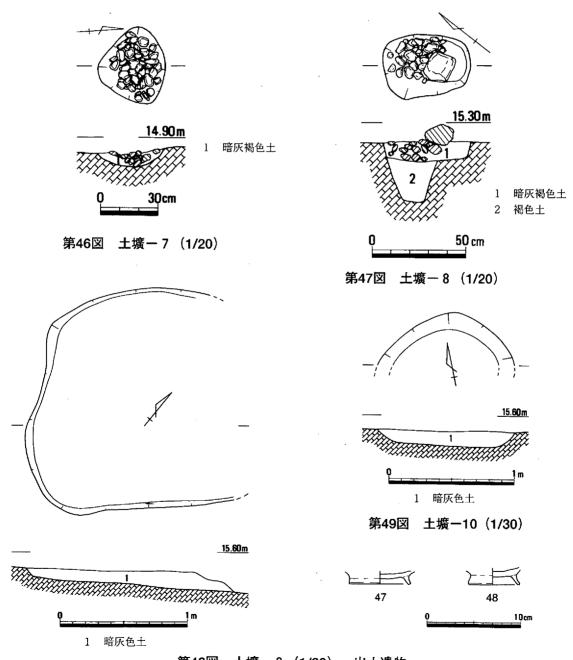
第3章 調査の概要

土壙-9(第48図)

3区の南西部に位置する。最大径およそ204cm、深さ約10cmを測る。土壙の北東部分が現代用水跡によって削られているが、形状は隅丸方形状を呈すると思われる。遺物は土師質土器椀の高台が2点出土している。47は高台部径6.4cm、48は高台部径5.4cm、ともに高さ約1cmを測り、高台は高く外反する。時期は12世紀代であると考えられる。 (時實)

土壙-10(第49図)

土壙-9の南、約4mに位置する。南側は調査範囲外へ続く。最大径約110cm、深さ約10cmを測る。 遺物は出土していないが、埋土が土壙-9と非常に類似していることから、土壙-9と同時期のもの と推定される。 (時實)



第48図 土壙一9 (1/30)・出土遺物

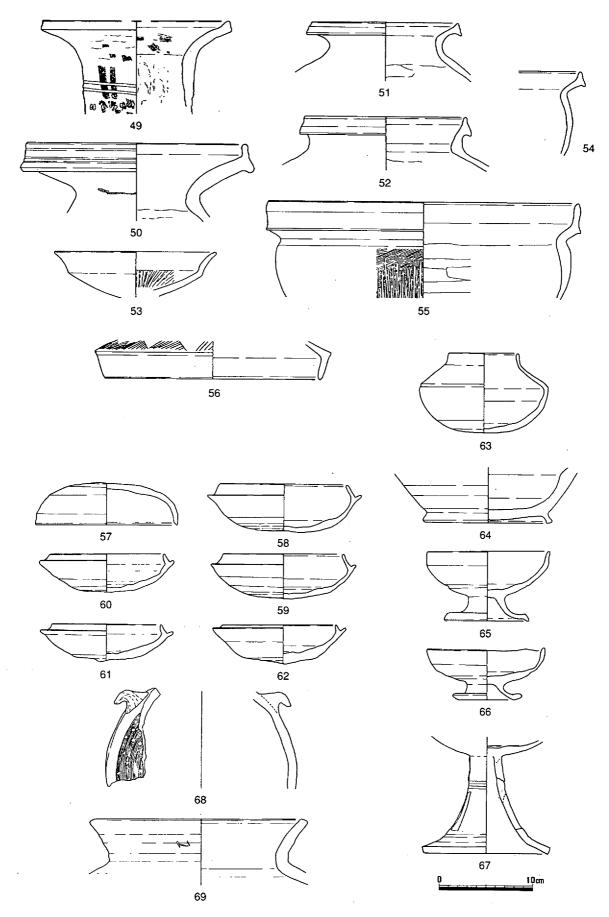
(4) 遺構に伴わない遺物 (第50~54図, 図版 6-3・7・8-2・3)

阿知境遺跡ほかの調査では、遺構に伴わない遺物が全部でコンテナ46箱分出土している。多くは黒褐色の遺物包含層から出土した土師器片と須恵器片であるが、それ以外にも弥生土器片や中世の土師質土器片をはじめ、陶磁器や土製品・鏡片などがわずかながら出土している。

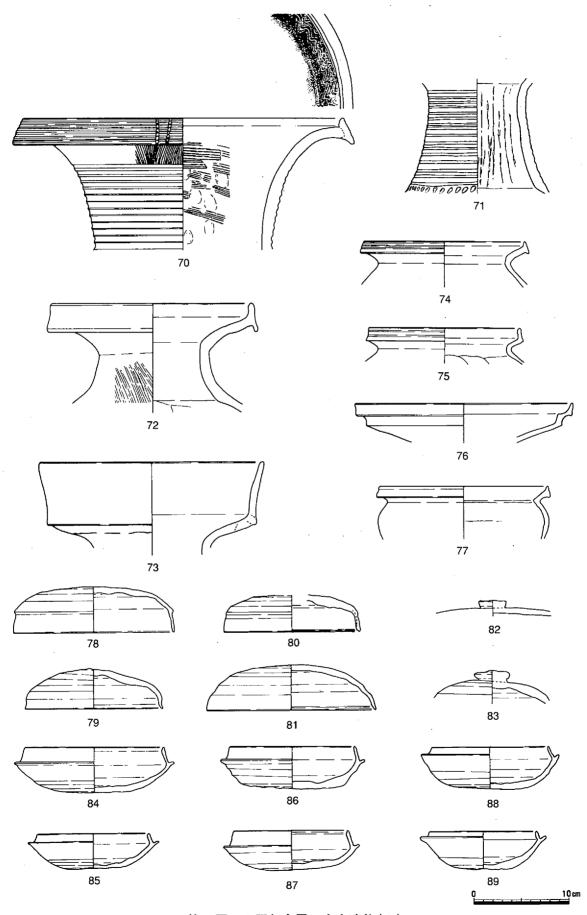
1区について、49から56までは弥生土器である。後期後半が大半を占める。49は長頸壺の口縁である。口縁部は外方向に広がっているが、端部を上方に引き上げた痕跡が見受けられる。頸部外面には、縦方向のハケメの上からへラ描きの沈線が巡る。沈線の下にはヘラ状工具による刺突文が1列認められる。50は広口壺の口縁である。口縁部には擬凹線が3条認められ、肩部は大きく「ハ」字形に開く。また頸部外面にはハケメを引き下ろす始点の痕跡が残存している。51・52は甕の口縁である。51は全体的に器表面の剥離が著しく、調整は不明瞭である。胎土は3㎜程度の小礫を含み、粗悪である。53は高杯の杯部である。体部内面にヘラミガキが施されている以外は、器表面が剥離していて不明である。54・55は鉢である。55は口縁部の上端を垂直に引き伸ばし、下端は外方向へわずかに突出する。外面は縦方向のハケメを、内面はヘラケズリが施されている。胎土は緻密で、内外面ともに丹塗りされている。この種のものは、小田川をさかのぼった矢掛町の白江遺跡から出土した白江Ⅱ式土器と類似する。56は特殊器台の脚部である。脚端部のみ出土した。裾部には鋸歯文が巡り、屈折部には外方向にわずかに引き伸ばして段を形成して内傾した端部に至る。外面には丹塗りの痕跡が認められる。若干小型品ではあるが、この遺物の出土により同一尾根・丘陵上に弥生墳丘墓の存在が考えられる。

57から69は須恵器である。57の杯蓋は天井部と口縁部の境にある稜がなくなり、緩やかな曲線を描く。天井部のヘラケズリは頂部付近のみに施されている。58から62は杯身である。立ち上がりが高く大型化している58・59と、立ち上がりが短く底部が偏平化する60と、ヘラ切りが未調整の61・62に区別される。63は短頸壷である。体部は丸い玉葱形を呈し、肩部と胴部の境には凹線が1条巡っている。64は台付長頸壷の底部である。底部にはあまり高くない高台が付され、内端部で接地する。65から67は高杯である。うち65・66の短脚の無蓋高杯は、口縁部が上方に引き上げられ、脚部は「八」字形に広がり、端部は65では下方へ屈曲させ、66は逆に上方へ引き上げている。長脚の67は杯部の底体部がわずかに残存し、脚部の大部分が出土した。脚柱部の上方約1/3付近に2条の凹線が巡り、その上下に長方形の透かしを3方向刻んでいる。脚端部は、緩やかに広がって内反させ、内端部で接地する。また脚柱部の粘土の継ぎ目痕跡が顕著である。68は提瓶である。復元偏平な円球形を呈し、把手が退化してかぎ型のものとなっている。胴部の最大径は推定で20.1㎝を測る。69は甕の口縁部である。口縁を外反させて端部内側にわずかに段を有する。肩部外面にはカキ目調整され、内面は叩き痕跡が認められる。頸部にはヘラ記号が3ヶ所確認される。

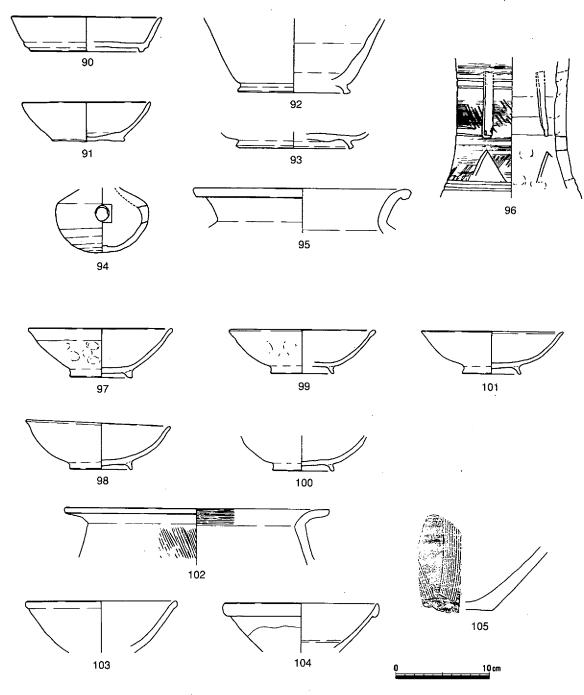
2区では最も多くの遺物が出土した。弥生土器は数点、中期の遺物を含むが、大半は後期のものである。70から73は壷である。70の広口壷の口縁端部は本体の成形後上下に拡張され、外面には凹線文を施して水平方向に刻み目を入れた棒状浮文を貼付している。また内面には、拡張した端部に沿うように波状文が描かれている。頸部外面には13条の太い凹線文を巡らせ、緩やかにひらく。時期は中期後半である。71は長頸壷の頸部である。緩やかに「ハ」字形に広がる外面に16条の凹線文が施され、



第50図 1区包含層 出土遺物



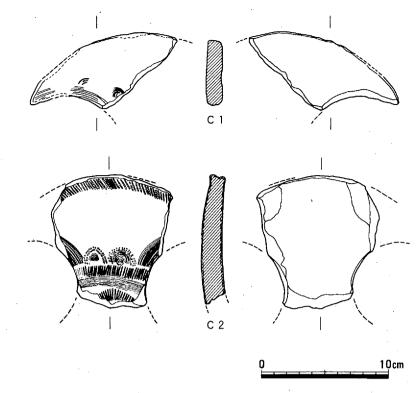
第51図 2区包含層 出土遺物(1)



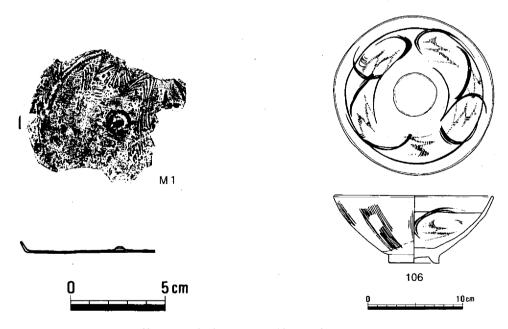
第52図 2区包含層 出土遺物(2)

内面には成形時の絞りの痕跡が著しい。また肩部には刺突文が巡っている。72は器表面が剥離していて調整は不明瞭であるが、頸部外面に縦方向のハケメが施され、内面肩部にはヘラケズリがなされてる。74・75は甕の口縁部である。口縁外面には凹線文が巡り、内面はヘラケズリが施されている。76の高杯は底体部と脚部を欠く。杯の体部から垂直に立ちあがり、段を形成してさらに口縁部を上方に拡張している。

78から96は須恵器である。出土の状況は1区と大差はないが、奈良時代の遺物が増える傾向にある。杯蓋では、まだ明瞭に口縁部と天井部の境に稜を有する78や大型化する79、偏平・縮小化する80・81、宝珠つまみが貼付された82・83が出土している。杯身では立ちあがりが高く、大型化する



第53図 包含層 出土土製品



第54図 包含層 出土鏡片・青磁碗

84・85・86や縮小化する87・88・89、口縁部を外反させて口径を大きくし、底部はヘラ切り未調整の痕跡が明瞭な90、底部をナデによって端部を再調整し、短く角張った高台を付している91などが出土している。92は台付壷の底部である。粘土巻上げ痕が残る体部に比較的高く、角張った高台を付している。93は盤である。台付壷の底部の可能性も考えられるが、底部からの角度が直立気味で、器厚が薄いことから盤と考えられる。その底部には高い高台が付されており、端部は内反させて端部で

第3章 調査の概要

接地する。94は腿である。頸部から上を欠く。体部はやや肩の張った玉葱形を呈しており、下半部にヘラケズリを施すほか、文様は認められない。円孔は外面から内面に向けて上方から下方へ穿孔されている。95は甕である。逆「ハ」字形に開く口縁部の端部は、外方向に屈曲させて厚みを持たせている。全体に自然釉が付着している。96は器台である。体部の約1/2が残存している。直立する筒状の体部から「ハ」字形に広がる裾部を有し、内面には粘土巻上げ痕跡が明瞭に観察される。外面には上下に長方形と三角形の透かしが4方向に穿孔されていると推定され、三角形の透かしの上下に2条の完結しない凹線を配している。器表面は、回転カキ目調整の後、粗雑な斜め方向の線刻文を描いている。また一部、板状工具によって水平方向に文様が消されている。胎土が6㎜程度の石粒を多く含むなど非常に劣悪である。

97から106は古代末から中世の土器である。包含層自体の堆積が少なかったためか、遺物の出土量も多くはない。97から101は土師質土器の椀である。口縁端部はヨコナデがなされ、体部外面にユビオサエの痕跡を残し、内面は丁寧なナデが施されている。色調は灰白色で、時期は13世紀後半から14世紀初頭である。102は土鍋である。口縁部は若干屈曲しながら外方向に伸びる。体部外面は縦方向の、内面には横方向のハケメが施されている。色調はにぶい橙色である。103と104は白磁の碗である。ともに玉縁を有する口縁部の一部分だけが出土した。時期は11世紀後半から12世紀初頭である。105は備前焼の擂鉢である。木目の細かい土によって成形されている。所産は室町時代頃である。106はM1と一緒に出土した青磁の碗である。台形上の高い削り出し高台から口縁部へ緩やかに内傾化する。外面には細かい櫛目を施している。内面上部1/3付近に沈線を巡らせ、内底見込みと体部の境に段が認められる。また高台接地面の磨滅痕が認められないので、入手後まもなく埋納されたものと考えられる。口径16.6cm、器高7.1cm、底径5.3cmを測る。12世紀後半から13世紀初頭の所産と考えられる。

土製品は2点出土しており、ともに1区から出土した分銅形土製品である。表面がわずかに凸面で、両面に化粧土が塗付されている。上縁の穿孔は認められない。C1は下半部分と右くりこみ部を欠く。頸部からくりこみ部先端にかけて櫛描文が、頸部の上部中央とくりこみ部中央付近には櫛による小重弧文が施文されている。C2は両くりこみ部と下半部を欠く。上縁の縁を残して窪め、表面に貝殻文が刻まれている。同様に頸部中央には水平方向の櫛描文の上下に貝殻文が描かれている。また貝殻文の上には小重弧文と刺突文が配され、くりこみ部には櫛描文が認められる。なおともに上縁部にみられる小穿孔が認められないので、下半部の可能性も考えられる。時期は弥生時代中期後葉から後期前葉と考えられる。

M1は、前述の106と同一地点から出土した和鏡の破片である。黒褐色の包含層から弥生土器や須恵器とともに出土したので、出土状況は不明である。径10.4cm、厚さ0.1cm、重さ15.9gを測る。緑は薄く、外反気味に開く細縁多傾の形態を呈する。紐は小さい捩菊座で、鋳型に文様を描く箆押しは薄い線描表現になっており、その文様から流水水草双鳥鏡と考えられる。また鏡の全面を被うように繊維状の付着物が認められる。製作年代は12世紀第2~3四半期とみられ、未使用の青磁碗と鏡片が出土したことで古代末~中世初頭の土壙墓が存在した可能性が考えられるが、現状で遺構を確認することができなかった。その他、図示していないが、弥生時代のミニチュア土器が数点と瓦片、中世のカマドの付け庇などが出土している。 (根木)

第4章 考察

今回、発掘調査を実施した阿知境遺跡では、丘陵東側斜面の調査面積4,000㎡の中で主に古墳時代後期の竪穴住居2軒、掘立柱建物12棟を検出し、さながら集落の様相を呈していることが確認された。ここでは、周辺の調査が行われた遺跡や先に調査を行った尾根間の谷部に位置する池田散布地と石塔鼻散布地の成果を踏まえて、断片的ながら弥生時代から古墳時代、さらには古代・中世に至る遺構の変遷をたどり、あわせて古墳時代における竪穴住居と掘立柱建物群の関係について若干の考察をおこなってみたい。

有井境地区において人々の生活の初源が認められるのは、弥生時代に入ってからである。弥生時代中期に谷を流れる自然流路を改修した溝や尾根の裾部に袋状土壙が疎薄に見受けられるだけである。周辺で確認されている弥生時代の遺構は、同一丘陵から派生する尾根上には西山遺跡が立地しており、集落遺構として中期末から後期後半にかけての竪穴住居が3軒、袋状ピットが8基検出されている。また墳墓遺構としては、特殊器台棺を用いた土壙墓や古墳時代前半期の円墳が検出されている。このことから弥生時代の後半期には、この丘陵付近での生活の萌芽が認められる。弥生時代後半期には平坦で安定した低丘陵上は居住地区として、後期末から古墳時代前半期にかけては、墓域として機能していたことが推定できる。

古墳時代になって、東側に竜王塚古墳が5世紀後半に築造されるようになると、丘陵の南側(阿知境遺跡1区)に建物群が形成されはじめ、その北側には土壙が規模を大きくしながら3ヶ所形成されてゆく。後半期には一辺6.5mの竪穴住居をはじめ、多くの建物群など遺構の立地は、北の東側斜面(2区)に移る。中には棟持柱や付帯施設として溝を伴う掘立柱建物が認められるようになる。この時に至って当該地区は、おりしも尾根を挟んで西へ約1.5kmの地点に位置する箭田大塚古墳の築造時期に前後して、遺構・遺物的にも最も充実した時節を迎える。さらに今回調査を実施していない1区と2区の間の地点であるが、地元の聞き取り調査によって耕作土直下から土師器・須恵器片がどの地点からも多く出土している、とのことから未確認ながら、遺構群の中心はこの未調査地点にある可能性が高い。

その後、時期の明確な遺構は奈良時代まで見られない。古代には遺跡の南側に山陽道が控えているが、地形的にも比較的安定した地盤が形成されて柱穴や溝、土壙などが検出されている。池田散布地の包含層からは、円面硯や丹塗りの土師器の皿を含む9世紀代の土器が多数出土している。丘陵裾部の阿知境遺跡では1棟だけではあるが、2間×1間の奈良時代の掘立柱建物が築造される。これらのことから古代における遺構の広がりは、阿知境遺跡の東、竜王塚古墳が立地する丘陵に挟まれた水田部分にあるものと考えられる。

以後は、単発的に和鏡や青磁碗を伴った土壙墓と思われる遺構や柱穴がわずかに検出できるのみである。遺物は現耕作土直下の包含層より中世から近世のものが若干出土する程度で、近世以降では、緩やかに傾斜する地形に即して段上の耕作地が形成され、現代に至っていると推定される。

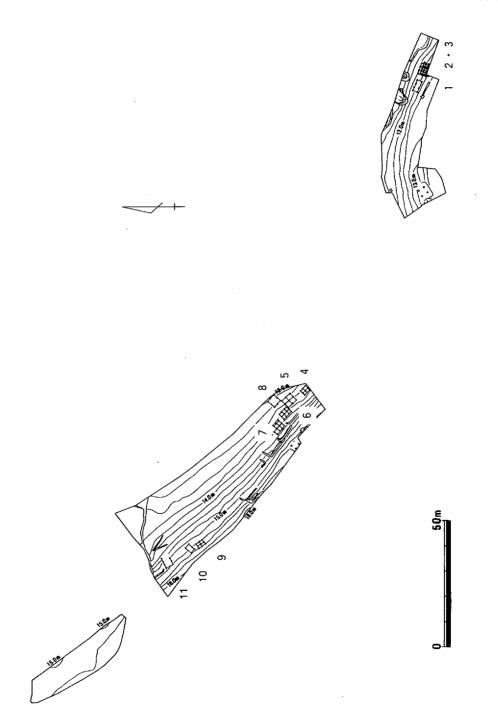
続いて、阿知境遺跡で検出された竪穴住居と掘立柱建物を中心とした集落としての様相について見てみたい。出土した遺物から古墳時代前期(Ⅰ期)、中期(Ⅱ期)、後期前半(Ⅲ期)、後期後半(Ⅳ期)

に分類できる。

まず I 期には、調査区全体で唯一検出された建物 - 1 がある。丘陵の北側に立地する小ぶりな建物で、尾根筋に対して並行に建てられている。この時期の遺構は、ほかに溝や土壙が若干検出されているだけで、まだ丘陵裾部における集落形成の萌芽はまだみられない。

Ⅱ期とⅢ期は、現状では竪穴住居や掘立柱建物は検出されていない。しかし阿知境遺跡の東側に立地する竜王塚古墳との関連から今後、付近で遺構が確認される可能性は高い。

N期は、竪穴住居とともに掘立柱建物が近接した形で集落形成が著しい時期である。検出遺構としては、床面の直上より TK10から43,209の須恵器と伴う竪穴住居 $-1\cdot2$ と建物 $-2\sim8$ が認められる。竪穴住居-1は一辺約6.5m、床面積は推定30 m^2 であって、作り付けのカマドを伴う県内で検



出された古墳時代後期のものではあまり類例を見ない大型のものである。また2区の竪穴住居-2の北側には、棟持柱や建物 $-6\cdot7$ のように付帯施設としての溝を伴うものも認められる。しかし、この期の7棟の掘立柱建物が同時期に建てられたものとは考えられない。2区の掘立柱建物群については、柱穴の埋土や出土遺物の状況から、TK10の段階に建物 $-4\cdot6\cdot8$ が建てられ(前半期)、引き続いて建物 $-5\cdot7$ が建て替えされた(後半期)ことが推察される。次に掘立柱建物群の施設についてみてみると、前半期の建物 $-4\cdot6\cdot8$ は、棟持柱を持った総柱建物2軒と側柱建物1軒のセット関係となり、中心に位置する建物-6は中央の柱が束柱である。床面積も 13 m^2 と 7.5 m^2 の2種類である。後半期には棟持柱を持った総柱建物と束柱建物のセットとなり、側柱建物は見られない。

今回の調査で得られた建物の断片的な資料では正確性を欠くが、まとめると I 期には前代までの丘陵上の高い位置に生活面を持っていたために居住・倉庫となる建物は丘陵裾部には建てられず、その後、 II 期・II 期の動向は不明ではあるが、存在の可能性は否定できない。後期後半の IV 期になっておりしも西に位置する箭田大塚古墳の築造時期とあいまって、竪穴住居と掘立柱建物によって集落が形成されたものと考えられる。海抜の高い地点に竪穴住居を築き、やや低いところに掘立柱建物群を築く形態は、やはり床面積の広狭や水害の憂慮などから基本的な住居と倉庫の関係を崩すものとは考えにくい。集落の形成は当時の地形に起因し、また方位によって建物群の統制が認められる岡山市百間川原尾島遺跡の考察があるが2、丘陵裾部に立地する当該遺跡は方位よりも当時の地形に左右されていたことが確認できよう。 (根木)

註

- 1 岡山県真備町教育委員会『西山遺跡』 1979年10月
- 2 平井勝「第4章 考察 第2節 古墳時代の集落と遺物 2.集落の変遷」 『百間川原尾鳥遺跡』3 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 88 1994年3月

	規模(間)	主軸方向	形態	柱間隔 (桁行、m)	柱間隔 (梁行、m)	床面積 (m²)	時 期	その他
建物 - 1	3 × 1	N25° W	側柱	1.55	2.06	9.4	古墳初頭	
建物 - 2	4 × 3	N20° W	総柱	1.58	1.79	16.4	古墳後半	
建物 - 3	4 × 3	N23° W	総柱	1.59	1.79	16.5	古墳後半	
建物 - 4	(2×2)	N43° W	総柱	1.54	1.16	7.5	古墳後半	棟持柱
建物 - 5	2 × 2	N49° W	総柱	2.21	1.87	16.5	古墳後半	棟持柱
建物 - 6	3 × 2	N45° W	総柱	1.51	1.39 13.3 古墳後半		束柱、棟持柱、付帯溝	
建物 - 7	3 × 2	N42° W	総柱	1.51	1.57	13.7	古墳後半	束柱、付帯溝
建物 - 8	2 × 2	N40° W	側柱	1.86	1.71	13.1	古墳後半	
建物 - 9	2 × 2	N 54° W	総柱	1.54	1.10	7.0	古墳以降	棟持柱
建物 - 10	2 × 1	N52° E	側柱	1.59	2.06	6.7	古墳以降	
建物 - 11	(3×2)	N27° E	側柱	1.40	1.59	13.7	古墳以降	
建物12	2 × 1	N44° W	側柱	3.48	1.46	10.3	奈良	
竪穴住居 - 1		N57° E	4 本柱	2.	60	30.0	古墳後半	カマド有
竪穴住居 - 2		N33° E	4 本柱	2.	20		古墳後半	カマド不明

表1 阿知境遺跡検出の掘立柱建物 規模一覧

第4章 考 察

出土土器観察表

池田散布地____

番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
1	T - 6	須恵器	杯蓋	16.6			
2	T - 6	須恵器	杯身	13.6		4.4	底部内側 荒いナデ
3	T - 6	須恵器	長頸壷		12.8	5.5	
4	T - 6	黒色土器	III	18.1	12.4		外面 一部黒色化
5	T - 6	土師器	Ш	12.9	8.0	1.8	全体に丹塗り
6	T - 6	土師器	杯	14.2	9.0	3.0	底部 ヘラ切り後指頭圧
7	T - 6	土師器	甕	30.4			
8	T - 9	須恵器	円面硯		13.0		
9	T - 15	土師器	製塩土器?				内外面 タタキ
10	T - 15	土師器	製塩土器?				内外面 タタキ
11	T - 15	弥生土器	甕				絵画土器,内面ヘラケズリ,外面ミガキ?

石塔鼻散布地ほか

番号	遺 構 名	種別	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
12	T - 5	弥生土器	壷				口縁内側 ハケメ
13	T - 5	弥生土器	甕	17.1		6.6	
14	T - 5	弥生土器	高杯				脚柱部 ヘラミガキ
15	T - 13	須恵器	杯蓋	14.0		3.9	天井部ヘラケズリ右
16	T - 13	須恵器	杯身	13.1		3.6	
17	T - 11	土師器	椀		5.9		内外面 調整不明瞭

阿知境遺跡ほか

	うれる。日本						
	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
18	竪穴住居 - 1	須恵器	杯蓋	16.0			天井部ヘラケズリ右
19	竪穴住居 - 1	須恵器	杯身	12.0			底部ヘラケズリ右
20	竪穴住居 - 1	須恵器	杯身	13.2			
21	竪穴住居 - 1		杯身				底部ヘラケズリ右
22	竪穴住居 - 1	須恵器	甕				内外面 タタキ
23	竪穴住居 - 1	土師器	甑				ユビオサエ、ナデ
24	建物 - 1	土師器	壷				内外面 調整不明瞭
25	建物 - 2	須恵器	杯身	12.3			
26	建物 - 5	須恵器	杯身				
27	建物 - 1	須恵器	杯蓋	13.9			天井部ヘラケズリ右
28	建物 - 2	須恵器	杯身	12.6			底部ヘラケズリ左
29	土壙 - 1	弥生土器	直口壷		4.7		内面ユビオサエ,ナデ,外面不明瞭
30	土壙 - 1	弥生土器	魙				体部外面 黒班あり
31	土壙 - 1	弥生土器	台付鉢		4.0		底部黒班,脚部ユビオサエ
32	土壙 - 3	弥生土器	甕	13.1			内面へラケズリ,外面ナデ
33	土壙 - 3	土師器	壷	19.1			内面ユビオサエ,ナデ,外面ハケメ
34	土壙 - 3	須恵器	杯蓋	13.0		4.2	天井部へラケズリ右
35	土壙 - 3	須恵器	杯蓋	13.9		4.0	
36	土壙 - 3	須恵器	杯身				底部ヘラケズリ左
37	土壙 - 3	須恵器	甕	34.5		21.3	内外面 ヨコナデ・タタキ
38	土壙 - 4	須恵器	杯身	13.0			
39	土壙 - 6	須恵器	杯蓋	15.2	,		天井部へラケズリ左
40	土壙 - 6	須恵器	杯身	12.6		3.8	
41	土壙 - 6	須恵器	杯身	12.4		3.5	底部へラ切り未調整,
42	土壙 - 6	須恵器	直口壷	7.2		16.0	頸部に2条の沈線,底部ヘラケズリ左
43	土壙 - 6	土師器	高杯		11.6		脚柱部内面 ナデ,外面 面取り
44	溝 - 14	須恵器	擂鉢?	13.8			頸部に2条の沈線, ヘラ描の線刻文あり
45	溝 - 14	須恵器	杯身	12.6			底部ヘラケズリ左
46	建物 - 12	須恵器	杯身		8.9		内面 自然釉,底部ヘラケズリ左
47	土壙 - 9	土師器	椀		6.4		内外面 調整不明瞭

番号	遺構名	種 別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
48	土壙 - 9	上師器	椀		5.4		内外面 調整不明瞭
49	1区包含層		壷				内面ハケメ・ユビオサエ,外面ハケメ,頸部凹線2条・刺突文
50	1 区包含層	弥生土器	壷	22.7			内面へラケズリ、外面ハケメ、口縁部擬凹線3条
51	1区包含層	弥生土器	甕	15.2			内外面 調整不明瞭
52	1区包含層	弥生土器	甕	16.9		Ī	内面ヘラケズリ、外面ナデ
53	1区包含層	弥生土器	高杯	16.6			内面ミガキ,外面 調整不明瞭
54	1区包含層	弥生土器	鉢				
55		弥生土器	鉢	32.7			内面ヘラケズリ、外面ハケメ・ミガキ、外面丹塗り
56	1区包含層	弥生土器			22.4		外面 円塗り 天井部へラケズリ右
57	1区包含層	須恵器 須恵器	杯蓋 杯身	14.7 13.7		5.2	大井部ペックスリ石
	1区包含層	須恵器	杯身	12.5		4.8	底部ヘラケズリ右
	1区包含層	須恵器	杯身	11.8		4.1	底部ヘラケズリ右
1	1区包含層	須恵器	杯身	11.4		4.0	
	1区包含層	須恵器	杯身	11.8		4.2	
63		須恵器	短頸壷	7.2		8.6	内面ヨコナデ,外面ヘラケズリ
64		須恵器	直口壷		13.8		底部内面 ユビナデ
	1区包含層	須恵器	高杯	12.9	9.0	7.5	内外面 ヨコナデ
	1区包含層	須恵器	高杯	12.4	7.4	5.6	内外面 ヨコナデ
67	1区包含層	須恵器	高杯		13.1		透かし 2個所
68	1区包含層	須恵器	堤瓶				
69	1区包含層	須恵器	甕	11.0			
70		弥生土器	長頸壷	33.9			凹線13条, 口縁部櫛描沈線 8 条·棒状浮文·波状文
71		弥生土器	長頸壷		ļ <u> </u>		凹線16条・刺突文, 内面 シボリ
72		弥生土器	壷	20.8	ļ		内 ヘラケズリ 外 調整不明瞭
73		弥生土器	壷	13.6			内外面調整不明瞭、粘土継ぎ目痕跡あり
74		弥生土器	甕	16.8			内面ヘラケズリ、外面ナデ
75			甕	16.6			内面ヘラケズリ,外面ナデ 内外面 調整不明瞭
76			高杯	22.8			内 ヘラケズリ 外 調整不明瞭
77		1	鉢	17.6		4.9	大井部へラケズリ右
78	2 区包含層 2 区包含層	須恵器 須恵器	杯蓋 杯蓋	17.0	 	4.9	人弁部ペクテムテ石
80			杯蓋	14.6		4.2	天井部ヘラケズリ右
81	2区包含層		杯蓋	14.2		1.2	天井部ヘラケズリ左
82	2区包含層		杯蓋	14.5	-	-	天井部ヘラケズリ左
83	2区包含層		杯蓋				7.47180
84	<u> </u>		杯身	14.8		4.8	
85			杯身	12.0		4.2	底部ヘラケズリ右
86			杯身	13.2		4.5	底部ヘラケズリ右
87	1		杯身	12.1		4.4	底部ヘラケズリ左
88			杯身	11.8	1	3.7	底部ヘラケズリ右
89	2区包含層		杯身	11.2		4.0	
90	2区包含層		杯身	13.4	7.6	4.3	底部ヘラ切り未調整
91	2区包含層		杯身	15.6	11.9	3.8	内外面 ヨコナデ
92			壷		11.8		内外面 ヨコナデ,体部粘土巻上げ痕跡あり
93			盤		12.3	ļ	内外面 ヨコナデ、体部ヘラケズリ
94			腺	<u> </u>			底部内側未調整、外面ヘラケズリ右
95			甕	22.5	1		内外面 ヨコナデ
96			器台	 			透かし2個1対 3個所
97		土師質土器		14.7	6.5	5.2	内外面 ヨコナデ、ユビオサエ
98	I .	土師質土器		15.0	6.6	4.7	内外面 ヨコナデ, ユビオサエ
99	1	土師質土器		15.0	6.2	4.5	内外面 ヨコナデ
	2区包含層			15.2	6.5 6.8	5.3	内外面 ヨコナデ
	2区包含層			27.8	0.8	<u> </u>	内外面 ハケメ
	2 2区包含層		一一碗	15.0			1.171.1回 (,) ().
	3 2 区包含層 4 2 区包含層		碗	15.8		-	露胎あり
	5 2 区包含層		擂鉢	10.0			<u> </u>
_	5 2 区包含層		碗	16.6	5.3	7.1	露胎あり 離れ砂 微量残存
100	기수단단리를	Fi VXX	1976	10.0	1 0.0	1	MERRIAL 1 DELLEY NOVEMBER 19

第4章 考察

土製品一覧表

番号	遺構名	時期	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(㎝)	重量 (g)	残存	備考
C 1	1区包含層	弥生中期後葉	分銅形土製品	5.5	7.8	1.4	82.75	欠損	-
C 2	1区包含層	弥生中期後葉	分銅形土製品	10.5	9.2	1.7	191.28	欠損	<u> </u>

石製品一覧表

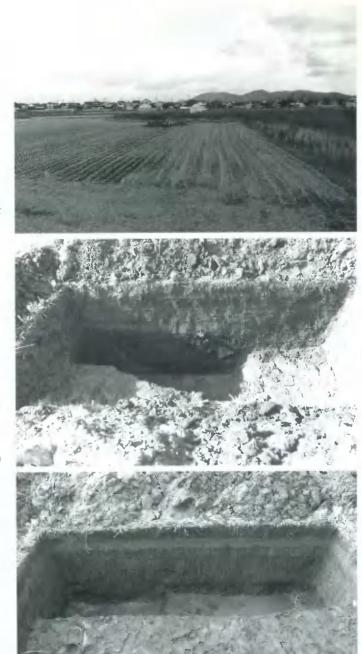
番号	遺構名	時期	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	残存	備考
S 1	石塔鼻T - 2	不 明	すりこぎ?	11.4	3.7	3.3	272.51	花崗岩	欠損	
S 2	竪穴住居 - 1	古墳時代	砥石	17.8	8.5	7.2	1338.28	流紋岩	欠損	

金属器一覧表

番号	遺構名	時期	器種	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	残存	備考
M 1	2 区包含層	平安末~鎌倉初頭	鏡	10.4	0.1	15.9	銅	約1/2	両面に繊維状の付着物あり

報告書抄録

ふりがな	いけださんぷち	・せきと	とうばな	ささんふ	らほか	· - #	うちざかい	いせきほか			
書 名	池田散布地・石	塔鼻散布	午地ほご	・阿知		ほえ	را				
副書名											
卷次											
シリーズ名	岡山県埋蔵文化	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告									
シリーズ番号	135										
編著者名	根木智宏・尾上元規・金田善敬・時實奈歩										
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター										
所 在 地	= 701−0136	岡山県	岡山市	西花尻	1325 —	3	TEL 086	-293 - 321	11		
発 行 機 関	岡山県教育委員	会									
所 在 地	7 700−0824	岡山県	岡山市	内山下	2 - 4	- 6	TEL (086-224-	1111		
発行年月日	西暦 1998年	11月 3	80日								
ふりがな	ふりがな		コー	- ド	北緯		東経	調査	調査	調 査	
所収遺跡名	所 在	地	市町村	遺跡 番号	0 / //		0 / //	期間	面積	原 因	
いけださんぶち池田散布地	おかやまけんきびぐん 岡山県吉備郡 まびちょうありい 真備町有井 あざいけだ 字池田		503		34度 38分 6 秒		133度 41分 10秒	19960107 ~ 19960117	901	m² 真備町県営 ほ場整備事 業に伴う確	
せきとうばなさんぶち 石塔鼻散布地 ほか	きびぐんまびちょう 吉備郡真備町 ありいあざせきとうばな 有井字石塔鼻		503		34度 38分 2 秒	-	133度 41分 3 秒	19960417 ~ 19960507	1561	認調査 m ²	
あちざかいいせき 阿知境遺跡 ほか	auchatusii 吉備郡真備町 ヤたあざあちざかい 箭田字阿知境		503		34度 38分 3 利		133度 40分 56秒	19970401 ~ 19970930	4000	真備町有井 境地区ほ場 整備事業に 伴う発掘調 査	
所収遺跡名	種 別	主な!	時代	主	な	遣	構	主な遺	貴物	特記事項	
池田散布地	集落跡	弥生			1 条 3 条	土柱		弥生土器 須恵器 土師器	E E	弥生時代後期 から古代にか けての遺構群	
石塔鼻散布地ほか	集落跡	弥生 古墳		土壙柱穴	1基	ì	大学 2条	弥生土器 須恵器 土師器	il il	弥生時代から 古墳時代にか けての遺構群	
阿知境遺跡 ほか	集落跡	弥生! 古墳! 古中		土壙 溝 1	1 E E E E E E E E E E E E E E E E E E E	!軒 114 14	•	本生土器 須恵部器 土師の質土器 ・ 大きでは ・ 大きでは は は は は は は は は は は は は は		弥生時代後期 からて最高 がのの 緩成された で で で が の に が の に る が る の の の の の の の の の の の の の の の の の	



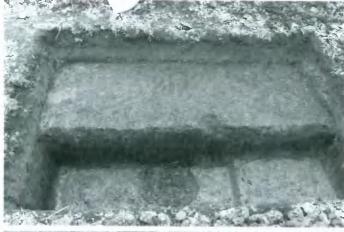
1. 池田散布地 調査地区 遠景 (西から)

2. T-9 (東から)

3. T-19 (東から)



1. 石塔鼻散布地 調査地区 遠景 (北からT-5~11 付近を望む)



2. T-5 (北から)



3. T-25 (東から)



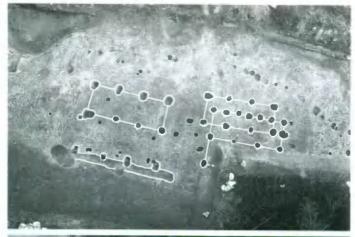
1. 阿知境遺跡 調査地区 遠景 (北東から)



2. 竪穴住居一1 (北から)



3. 竪穴住居-2 (東から)



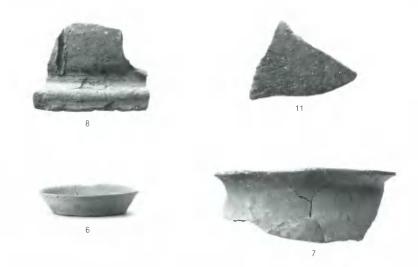
1. 建物-1~3 溝-2 土壙-4,5 (南から)



2. 竪穴住居-2
 建物-4~8,12
 土壙-1
 溝-3~8
 (北東から)



3. 土壙一1 遺物出土状況 (北東から)



1. 池田散布地 出土遺物



2. 阿知境遺跡 竪穴住居-1 出土遺物



3. 土壙-1 出土遺物



1. 土壙一3 出土遺物



2. 土壙一6 出土遺物



3. 包含層 出土遺物(1)



包含層 出土遺物(2)



1. 石製品



2. 土製品



3. 鏡片

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告135

池 田 散 布 地 石塔鼻散布地ほか 阿知境遺跡ほか

真備町有井境地区ほ場整備事業 に伴う発掘調査

> 1998年11月4日 印刷 1998年11月30日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター 岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会 岡山市内山下 2 - 4 - 6

印 刷 サンコー印刷株式会社